诗曲新评

後編

912.3
M231y

912.3M 231y

謠曲新評後篇

目録

○海士　一頁
○櫻川　十七頁
○熊野　三十頁
○融　四十九頁
○蟬丸　六十三頁
○賴政　八十二頁
○野宮　百頁
○千手　百十二頁

国立国会
297.22
図書館

237566

○江口　百三十二頁
○富士太鼓　百四十九頁

謡曲新評後篇

松風閣主人評註

海人

曲中ノ事實ハ、全ク大織冠物語、并ニ志度寺縁起ニヨリテ書ケリ、サレト此事ハ虚說ニシテ、二書トモニ、日本紀允恭紀ノ文ヲ符會シ作リタルモノナリ、允恭紀二、十四年秋九月、天皇獵ニ于路淡島ニ、時麋鹿猿猪、莫々紛々、盈ニ于山谷ニ、焱起蠅散、然終日不レ獲ニ一獸ー、於是獲ニ止以卜矣、嶋神祟之曰不レ得レ獸者是我心也、赤石(アカシ)海底有ニ真珠ー、其珠祠レ我、悉當レ得レ獸、爰

出るぞ名殘三日月の○三日月い見え初めて程おく入る故ゑ出るぞ名

更集ニ處々白水郎一令レ探ニ赤石海底一海深不レ能レ至レ底唯有ニ一海人一曰ニ男狹磯一是阿波國長邑之海人也、勝ニ諸海人一是腰繫レ繩入ニ海底一差頃之出曰於ニ海底一有ニ大鰒一其處光也、諸人皆曰、嶋神所レ請之珠、殆有ニ是鰒腹一乎、亦入探レ之、爰男狹磯抱ニ大鰒一泛出之、乃息絶以死ニ浪上一既而下レ繩測ニ海底一六十尋、則割レ鰒實真珠在ニ腹中一其大如ニ桃子一乃祠ニ嶋神一而獻之、多獲レ獸也、唯悲ニ男狹磯一入レ海死一則作レ墓厚葬、其墓猶今存之トアリ

出るぞおごり三日月の○〈○都の西にいそがむ（冒頭次第）

殘と云ふさて月といふより都に係く月の都とはもと月宮殿をいふなり

天の兒屋根云々○天兒屋根命い神代紀ふ日神居天石窟時中臣遠祖天兒屋根命以神祝祝之と見えて中臣藤原氏等の祖神おり又房前い藤原不比等公の子母い右大臣鎌足連子女にて參議從三位氏長者とおりぬ後れ正一位太政大臣を贈らる

讃州志度の浦○讃岐國志度浦い三木郡にあり

ヲ置ク是常例○新月ヲ把テ旅行ニ喻フ而レテ自然ノ情趣アリ

天の兒屋根の御ゆつり。房崎の大臣とハ我事なり。

房前ノ大臣ハ贈官ナリ而シテ自ラ大臣トイフハ恰モ不比等ヲ生中淡海公トイフニ同シ

さてもみつからが御母ね。讃州志度の浦。房崎と申を所にて。空しくおりぬひぬと。承てハへば。急ぎ彼所に下り。追善をもあさばやと思ひハ。是大臣房前ノ語

あらてぬ旅にあら坂や。かへりみかさの山かくを。春の霞ぞうらめしき。三笠山、今ぞ祭えん此岸の。〈。南の海にいそがむと。行けば程おく津の國の。こや日の本のてしめおる。淡路のわたり末近くゝなるとの沖におとそるて。泊り定めぬ蜑小舟

房崎の浦い其處の惣名
なり
山かくを霞ゞ春い○古
今集ゑ山かくす霞ゞ春
いうらめしき何れ都の
境なるらんとあり
今ゝ榮えん○新古今集
ゑ補陀落の南の岸に堂
たてゝ今ゝ榮えん北の
藤波とあり
おや日の本の云々○こ
やい摂津國ゑある昆陽
ゝ云る地名をとりて此
哉といひかけしなり淡
路い神代紀に伊奘諾
伊弉冊尊始遊合爲夫
婦及至産時先以淡路國
爲胞とあるに依て日本
の始と云へり
鳴門の沖ゑ音をるい○
諸曲拾葉抄に古哥に雖
も此鳴門の奥ゑ音をる
いとまり定めぬ蜑小舟
かなとありといへり
海士の苅藻ゑ云々○伊
勢物語ゑ蜑の苅る藻に
もむ虫のわれからと音
をゝ泣め世をい恨み
にとあり
あまの、里○拾葉抄に
あまの、里い志度寺の
丑寅にありて海人の墓
ありといへり
内外の山○伊勢の内宮

〳〵。房前ハ奈良朝ノ大臣ナリ奈良ノ帝都ノ發ノ四國ニ赴ク所情景並ヒ叙ス筆致活動 御急ぎいほとに。是
いはや志度の浦に御着にて御座い。又あれを見れば。
男女の差別いまらぞ。人一人采りい。彼の者を御待ち
有て。此所のいてれを。委しく御尋あらうずるにていい。
是房前ノ家人ノ語 海士の苅る、藻にそむ虫にあらねとも。我から
ぬらす袂かな。一句自ラ爲手榮ヲナス ノ次榮ヲ是い讃州志度の浦。寺近けれ
ともゝ心なさ。あまの、里の海人にていい。是蜑婦ノ語 實や名に
おふ、伊勢をのあまれい夕波の。内外の山の月を待ち。濱
萩の風に秋を知る。また須磨のあま人い塩木にも若
木の櫻を折り持ちて。春を忘れぬたよりもあるに。て

の浦ふてもなくさみも。名のみあまの、原にして。花
の咲く草もなし。何をみるめ苅うよ。かくても運ぶ濱
川の。〳〵。塩海かけて流れ蘆の。世をわたるわざな
れば。心おしともいひがたき。あまの、里に歸らん。
〳〵。此段蜑婦ノ情体ヲ叙ス いかに是なる女。かことい此浦の蜑婦
にてあるか。家人ノ語 さんい。此浦のかつぎの蜑婦にていい
蜑婦ノ語 かつぎのあまならば。あの水底のみるめを苅て參
らせいへ。家人ノ語 いたてしや旅つかれ。うへにのそませ
ぬふりやっ我が住む里と中をに。かほと賤しき田舍の
てに。ふしぎや雲の上人を。みるめ召されいへ。苅

外宮をいふ
濱荻〇万葉集仙覺抄に伊勢國にい芦を濱荻といふなり摂津國にい芦といひ吾嬬にいよしといふ云々とあり
流れ芦の世を渡る〇新六帖に人並まさても世渡る流れ芦のうきふしにいうきれおしつゝとあり
かつきの蜑婦〇俗名鈔に本朝式云伊勢國等潜女和名加豆岐来とありかつぐい水を潜ることなり

るまてもおし。此みるめを召されいへ。（蜑婦ノ語）いや〳〵さやうの爲にていおし。あの水底の月を住覽ぎるに。みるめ茂りて障りとなれば。苅りのけよとの住詞おり（家人ノ語）さていい月のため苅りのけよとの住詞かや。昔もさるためしあり。明珠をこの沖にて。龍宮へとられしを。かつきあげしも此浦の。あまみつ月も潮の。〳〵。みるめをいざやらうよ。（蜑婦ノ詞）暫。何と明珠をかつきあげしも。此浦の海士にてあるとやそか。（家人ノ語）さんい。此浦のあまにていい。またあれなる里をい天野の里とやして。かの海士人の住みぬひし在所にていい。ま

玉中に釋迦の像まします〇神明鏡に嘉暦二年南都七大寺衆徒共確執の事共有て双合戰興福寺へ押寄て焼拂けるに淡海公の御時本尊の御首を籠め給ひし龍宮より求めし面光普曜の珠も此時失ぬ云々とあり此玉の説はやくよりありしなり
淡海公の御妹い云々
高宗い唐の主筭三淡海公い不比等の誤なり不比等の妹の高宗の后となるおとい全く虚構なり

た是おる嶋い。かの珠をとりあげ。始めてみそめしによつて。新しき珠嶋と書いて。新珠嶋とやしい。（蜑婦ノ詞）さてその玉の名をべ何とやしけるぞ。（家人ノ語）玉中に釋迦の像ましまを。いつかたより拜み奉れともつ同し面おるによつて。面を向ふに背かぎとかいて。面向不背の珠と。やしい。（蜑婦ノ語）かほたの寶を何とてかつ漢朝よりもわたしけるぞ。（家人ノ語〇漢朝よりも渡しけるノ語突如トシテ承クル所ナシ釋迦ノ像ナリシヨリテ直ニ漢渡トナスハ家人ノ口少シク早計ヲ免レス）今の大臣淡海公の住妹い。唐土高宗皇帝の后にたゝせぬふ。さればその住氏寺なればとて。興福寺へ三の寶をわたさるゝ。花原磬。泗濱石。面向不背の

興福寺○帝王編年記に元明天皇和銅三年右大臣正二位藤原朝臣不比等建興福寺とあり

華原磬泗濱石而向不背の玉○磬は説文に磬樂石也とあり華原の石にて作りし磬なるべし泗濱石は禹貢に泗濱浮磬注に泗水中見石可以爲磬とあれば泗濱石も磬の如く聞ゆれど一説に硯也と云へり玉は神明號の説前にいへり

恵み開けし藤の門○藤の門は藤原氏の一門といふ義なり日本紀に天

玉。二の寶は京着し。明珠は此沖にて龍宮へとられしを。大臣御身をやつし。此浦に下りぬひ。いやしき蜑乙女と契りをこめ。一人の御子をまふく。今の房崎の大臣是なり。（蜑婦ノ語）やあ。是こそ房崎の大臣よ。あらなつかしのあまびとや。（房前ノ語）猶〳〵語りいへ。（房前ノ語）あら何ともなや。今までのよその事とこそ思ひつるに。さては御身の上にていひけるぞや。あら便なやい。（蜑婦ノ語）みつからは大臣の御子と生れ。恵み開けし藤の門。されとも心にかゝる事は。（此身木野）このみ殘りてはゝあらじ。（藤トイフヨリ此身ヲ木ノ實母ヲ母ニ寄ス）ある時傍臣（ぼうしん）はたりていとく。かたしけ

（ニカヽ筆ヲ弄スル巧緻トイフヘシ）

智天皇八年内大臣鎌足改中臣姓爲藤原氏とあり

はゝき木○箒木おり袖中抄に箒木は美濃と信濃の堺その原と云ふ所にあり遠く見れば箒を立たるやうにて近くて見れはそれに似たる木もおしとあり

雨露の恩○白氏文集に君恩若雨露君威若雷霆とあり

なくも御母は。讃州志度の浦。房崎の、あまりやせば（蜑婦）恐ありとて詞を殘を。さてはいやしき海人（蜑婦）の子。賤（しつ）の女の腹にやとりけるぞや。よしそれとてもはゝき木に。〳〵。去ばし宿（やど）るも月の光り。雨露（うろ）の恩にあらぬやと。思へば尋ね来りたり。あらなつかしのあまびとや。（房前ノ詞伏仰感慨）と袖涙を流しぬへば。實に心おき蜑衣。さらでもぬらを我袖を。かさねてあはれとや。かたしけなの佐事や。かゝる貴人の。賤しきあまの胎内に。宿りぬふも一世おらず。たとへば日月の庭潦（にわたづみ）にうつりて。光陰をまもでとくなり。我等もそのあまの。子孫と答

ゆかりに似たり紫の○古今集ニ紫の一本ゆゑニ武蔵野の草はみなかちあはれとぞ見るとありて紫の縁に依りて他の草も皆あはれと思ふといふよりゆかりといふなり

千尋の繩○韻曾に六尺曰尋とあり

へやさんれ。こども愚や我君の。ゆかりに似たり紫の。藤咲く門の口を閉ちて。いたしや水鳥の。かたうゆの名をばくたそまじ。蜑婦ノ心情房前ノ感慨ト相表裏スツ鴛鴦ト鷗鷺トヲ合セテ御主ニカケタリ巧過テ謎詞ニ陷ル

宮薄、鵜鷺、御主

レト鴛鴦ハヲシ御主ハオシユウナレハ仮字違ヘリ

とてもの事にかの玉をかつきあけし所を。佐前にてそとまなふて。御目にかけ候へ。家人ノ語

さらばそとまなふて。御目にかけ候べし。其時あま人やをやう。もし此玉をとり得たらば。此御子を、世繼の佐位になしぬへとやし、かば。子細あらしと領掌しぬふ。さてハ我子ゆゑに捨てん命。露ほども惜からじと。千尋の繩を腰につけ。もし此玉をとり得たらば。

雲の波煙の波云々○白氏文集に海漫々直下無底旁無邊雲濤煙浪最深處人傳中有二神山一とあるによれり

八龍○八大龍王にて難陀龍王、跋難陀龍王、沙伽羅龍王、和修吉龍王、徳刃迦龍王、阿那婆達多龍王、摩那斯龍王、優鉢羅龍王をいふなり

此おはを揺かそべし。其どき人々力を添へ。引き上げぬへと約束し。ひとつの利劒を抜き持つて。かの海底に飛び入れば。空ハひとつに雲の浪。煙の波をあのきつ。かいまむ〳〵と分け入て。直下と見れども底もなく。ほとりもあらぬ海底に。そも神變ハいざあらず。取り得ん事ハ不定なり。かくて龍宮にいたりて宮中を見れハ。其高さ三十丈の玉塔に。かの玉を籠め置き。香華を供なへ、守護神ハ。八龍并ひ居たり。其外惡魚鰐の口。逃れがたしやわが命。さまが恩愛の故郷の方ぞ戀しき。あの波のあなたにぞ。吾子ハあらん。大臣

南無や志度寺の觀音薩埵の○南無は巻導玄義に言南無者即是歸命亦是發願廻向之義とあり
觀世音とは世の音を觀することにて衆生の音聲を觀じて助くるの義なり薩埵は衆生大心ありて佛道に入るを菩提薩埵といふなり
大悲利劒○千手陀羅尼經に若爲降伏一切魍魎鬼神者當於寶劒手とある意なり
龍宮のあらひに死人を忌めむ○按に大海に死

も おむもらん。さるにても此まいに。別れ果てなん悲しさよと。涙ぐみて立ちしが。又思ひ切て手を合せ。南無や、志度寺の觀音薩埵の力をあてせてたびぬへとて。大悲の利劒を額にあて。龍宮の中に飛び入れば。左右へむつとぞのいたりける。その隙に寶珠を竊み。取てにげんとすれば。守護神おつかく。無てたくみも事あれば、持たる劒を取り直し、乳の下を搔切り、玉を押籠め、劒を捨てゝぞ伏したりける、龍宮の習慣に死人を忌めて。あたりに近つく惡龍おし。約束の繩を搖かせば。人々よろこび引き揚げたりけり。玉はあら

ずあま人は、海上に浮び出てたり、かくて浮びは出てたれとも。惡龍のわざと見えて。五躰もついかも紅に成たり。玉も徒になり。主も空しくありけるよと。大臣歎きなふ。その時息の下よりやをやう。我乳のあたりを御覽ぜとあり。實にも劒のあたりたる跡あり。其中より光明赫奕たる玉を取り出を。さてこそ御身もの約束のごとく。此浦の名によせて。房崎の大臣とは申せ

（其時以下蜑婦玉ヲ取ル當時ヲ形容レテ言フ詞ナリ字々熱血眞ニ是驚魂駭魄ノ文）

今は何をか包むべき。是こそ御身の母あまびとの幽靈よ。此筆の跡を御覽じて。不審をなさで吊へや。

（さらむ以下蜑婦即チ幽靈ノ語）

今はかへらん

ア を宿さむといへる古語はあるべし涅槃經に譬如大海有八不思議云々七不宿死屍とあり

明けて悔しき浦島が○浦島子の事い扶桑略紀ゑ雄略天皇の時丹後國與謝郡の人とありて明けて悔しきい島子龍女より得たる玉匣を開きて俄に顔色衰へ老人とありて死せしを云ふ魂黄壤ゑさつて云々○魂去黄壤一十三年埋骨於白沙經日月算云々本文未考さて十三年忌よ追善をおずい或説ゑもと胎藏界の十三院ゑたとへたるおりといへり花の蓮の妙經○下の調に法花經を出さんとて

仇浪の。よるこそ契れ夢人の。明々て悔しき浦島が。親子の契りあさましほの。波の底に沈みけり。立つ浪の下に入りにけり。海ニ沈ム所語ノ反覆シテ限ナキ感慨アリ いかにやし上けい。あまりに不思儀なる事にて候程に御手跡を披いて御覽ぜられうぞるにて候。家人ノ語 さてい亡母の手跡かと披いてみれば、魂黄壤にさつて一十三年。骸を白沙に埋むて日月の筭を經。冥路昏々たり我を吊ふ人なし。君孝行たらい已が冥闇をたをけよ。是幽霊蛭婦ノ詞 實にそれよりい十三年。さてい疑ふ所おし。いざ吊てん此寺の。志ある手向草。華の蓮の妙經。種々の善をか

かくいへるおり

寂莫無人聲○法華經法師品に寂莫無人聲讚誦此經とあり

五逆の達多云々○五逆い隨身抄ゑ一殺父二殺母三殺阿羅漢四出佛身血五破和合僧此小乘五逆罪也とあり達多い五逆を犯したれとも法華の會座ゑて成佛したり天王記剃い天王印可といふゑ同し

八歳の龍女い云々○法華經提婆品に文殊師利言有婆羅竭龍王女年始八歳云々當時衆會皆見下

しなふ。〈〉。此段房前蛭婦ヲ亡母ト認定シテコレヲ避吊スルサマヲ叙ス 寂寞無人聲。是房前讚經ノ辭 あら有難の御吊やな。此御經に引かれて。五逆の達多い天王記剃を蒙り。八歳の龍女い南方無垢世界に生をうくる。なほ〈〉轉讀しなふへし。是蛭婦ノ詞 深達罪福相遍照於十方。微妙淨法身具相三十二。以八十種好用莊嚴法身。天人所戴仰龍神咸恭敬。是又讚經ノ辭 あらありがたの御經やな。今此經の徳用にて。〈〉。天龍八部人與非人。皆遥現彼龍女成佛。是蛭婦ノ佛調 さてこそ讃州志度寺と號し。毎年八講朝暮の勤行。佛法繁昌の靈地とおるもこの孝養とうけたまはる。

龍女忽然之間變成男子
具菩薩行即行南方無垢
世界坐寶蓮華成等正覺
三十二相八十種好普爲十方一切衆生演說妙法との經文によれり
深遠罪福云々○提婆品讃佛の偈あり
天龍八部人與非人○是も提婆品の文なり八部とい名義集は一天二龍三夜叉四乾達婆五阿修羅六迦樓羅
七緊那羅八摩睺羅伽とあり
毎年八講朝暮の勤行○八講とい法華の法門を論とる事なり一日は朝座夕座二度あり一度に一巻を講ト
て四日は終る八巻を八度は講する故に八講といふ

意匠奇古、筆力蒼勁、蓋シ謡曲中ノ古文ナリ、

此文と身の代と云々○
文い消息文なり身の代
とい身を賣りし代物を
云櫻の馬場い日向國兒
湯郡咲屋姫神社の邊は
あり

櫻川

櫻川ハ、常陸國ニアリテ、筑波山ヨリ流レ出ル川ナリ、皆野川ト同流ナリトイヘリ、櫻ノ名所ニテ、古ヨリ名アリ、事實ハ全ク著者ノ作ル所ニカ、ル、但万葉集ニハ、櫻兒トイフ名見エタリ、

かやうに候者い。東國方の人商人にて候。吾久しく都に候ひしが。此度ハ筑紫日向に罷り下りて候。又昨日の暮程に。をさおさ人を買ひ取りて候。かの人やされ候ハ。此文と身の代とを。櫻の馬場の西にて櫻子の母と尋ねて。慥に届けよと仰せ候程に。只今櫻子の母の

方へと急ぎ候。此あたりにてありげに候。まつ〳〵案内をやさぐやと存じ候。いつに案内や候。櫻子の母の渡り候か。（是人商人ノ語）誰にてあたり候ぞ。（是櫻子ノ母ノ語）さん候。櫻子のかたより御文の候。又この代物を。慥に届け申せと仰せ候程に。是迄持て參りて候。かまへて慥にと、け申さにて候。（商人ノ語）あら思ひよらぬや。まつ文をみうぎるにて候。さても〳〵此年月の御有様。見るもあまりの悲しさに。人商人に身を賣りて。あつまの方へ下り候。なう其子い賣るまじき子にて候ものを。や。あら悲しや。てや今の人も。行方さらずおりて候いいか

神も木花開耶姫○日本紀ニ一書云彼國有美人名曰鹿葦津姫亦名神吾田津姫亦名木花之開耶姫矣とあり

常陸國磯邊寺○磯邊寺い眞壁郡ニ在りて行基の開基なり

ま。是を出離の縁として。御様をもかへぬふべし。唯返せ〳〵も御名残こそ惜う候へ。（是母愁歎ノ語）名残をしくべ何しにか。添いて母にい別るらん。獨伏屋の草の戸の。〳〵。明し暮して憂き時も。子をみれいこそ慰むに。さりとても我たのむ。神も木花開耶姫の。御氏子ふるものを。櫻子とめてたびぬへ。さおさだに、をみうかれたる故郷の。今い何にかあけくれを。たえて住むへき身からねい。わか子の行くへ尋ねむと。なく〳〵迷ひ出て、行く。〳〵。山路の春にいそがむ。（此段母櫻子ノ行遊ヲ尋子行ノサマヲ敘ス）頃待ちえたる櫻がり。（是次第）是い常陸ノ國磯部寺の

筑波山ホのもかのもの
○筑波山ハ常陸國筑波郡ニあり古今集に筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君か御蔭にまさる蔭はなしとあり

住僧にて候。又是に渡り候効さ人はいつくとも志らず。愚僧を頼むよし仰せ候程に。師弟の契約をおし申して候。又此あたりに櫻川とて花の名所の候。今を盛の由申し候程に。をさおさ人を伴ひ申し。唯今櫻川へと急ぎ候（是僧ノ語）筑波山このもかのもの花盛。〳〵。雲の林の蔭茂さ。みとりの空もうつろふや。松の葉色も春めきて。嵐も浮ぶ花の波。櫻川にも着にけり。〳〵。（此段僧櫻子ヲ伴フテ櫻川ニ至ルサマヲ叙ス措辭艶麗）ぞ。待ち申して候（是寺僕ノ語）さん候。皆々御供申候程に。さておそなそりて候。あらみごとや候。花ハ今を盛と見えて候（僧ノ語）おか〳〵のこと。花ハ今がさかりにて候。又こゝに面白き事の候。女物狂の候が。美しきをくひ網をもちて。櫻川に流るゝ花ををくひ候が。けしからずおもしろう狂ひ候。是に暫く御座候て。此物狂ををさおさ人にも見せ參らせられ候へ。（僕ノ語）さらばその物狂を此方へ召され候へ。（僧ノ語）心得申し候。やあ〳〵。かの物狂にいつものごとく。をくひ網をもちて此方へ来れと申し候へ。（僕ノ語）いかにあれなる道行人。櫻川にハ花の散り候か。なに散がたに成たるとや。（要ノ語突如先ツ其狂氣ヲ見ル）悲しやな。さなさだに逝くこと易さ春の水の。流るゝ

櫻花散にし風の○古今集ニ櫻花散ぬる風の名殘には水おき空ふ波ぞ立けるとあり

散は涙の川やらん○涙川を川に譬へて云ふ涙川は伊勢ニある名所ニ「心つくしの海山越えて云々○源氏物語常夏帖に常陸おる駿河の海の須磨の浦浪立いでよ箱崎の松とある歌にてかけり須磨は播津箱崎は筑前おり

名ニ流れたる櫻川○夫木集に風ふけむ浪も櫻重の櫻川名に流れたる

花をや誘ふらん。此段途中櫻川ノ落花ヲ想像ス 花ちれる、水のまに〳〵とめくれば。山にも春はなくなりにタり。と聞く時は。そこしおりともやそちはべ。花にや疎く雪の色。櫻花散ふし風のおごりには。水おき空に波ぞたつ。思ひも深き花の雪。ちるは涙の川やらん。句々春ヲ惜ミ花ヲ傷ムノ意ヲ帶フ 是に出たる物狂の故郷は。筑紫日向の者。さも思ひ子を失ひて。思ひ亂たる心つくしの。海山越えて箱崎の。浪（波、筑紫）立ち出て、須磨の浦。または駿河の海過て。常陸とかやまて下りきぬ。實や親子の道ならずは。てるけき旅をいかにせん。此段更ニ筑紫ヨリノ旅立ヲ叙シテ過ニ首段迷ひ出て、行くニ應ス てゝに又名に

水の春かおとあり

あまさかる鄙の長途云々○天避るは鄙の冠辭おり古今集に思ひきや鄙の長路に袁へて蜑の繩たきいさりせんとはとあり

面忘れ○万葉集ニ面忘れいかおる人のをる物ぞとあり

冬籠り○古今集に難波津にさくや此花冬籠り今は春べとさくや此花とあり此歌ニよりてかけり

流れたる櫻川とて。さも面白き名所あり。別れし子の名も櫻子おれは。形見といひ。折からといひ。名もおつゝしき櫻川に。散り浮く花の雪をくみて。みつからは花衣の。春のあたみ殘さん。此段櫻川ニ來テ落花ヲ目擊ス 花鳥の、立ち別れつゝ親と子の。〳〵。行くへもおらであまざかる。鄙の長途にれとろへば。たゞひ逢ふとも親と子の。面忘れせばいかならん。うさてや、おばしてそ。冬ごもりして見えぞとも。今は春べなるものを。我子の花は。ぬと咲かぬ〳〵。愛情切々花ハ亦涙ヲ灑ク この物狂の事にてありげに候。立よりて尋ねばやと思ひ候。いのゝ是おる狂女。

渇仰○長永楞嚴注に渇仰者思渇瞻仰也とあり

れことの國里(くにさと)ゐ、いつくの人ぞ。(僧ノ語)是ゐ遥(はるか)の筑紫の者にて候(狂女ノ語)それゐ何(なに)とてかやうに狂亂といゐ成たるぞ(僧ノ語)さん候。只ひとりある忘れがたみのみとり子に。生(い)さて離れて候程ゐ。思(おもひ)が亂れて候。(狂女ノ語)あら痛(いた)はし や候。又見申せゞ美しきをくひ網を持ち。流るゝ花ををくひ。あまつさへ渇仰(かつぎやう)の氣色(けしき)みえゐひて候。是ゐ何と申したることにて候ぞ。(僧ノ語)さん候。わか故郷の御神をゞ。木花開耶(このはなさくや)姫と申して。御神体ゐ櫻木にて作入り候。されゞ別れし吾子も。その御氏子おれば。櫻子と名つゝそたてしかば。神の御名もさくや姫。尋ぬる

貫之○紀氏系圖に孝元天皇御末武内宿禰苗裔父紀望行とあり古今の作者おり

常よりも春べにおれむ

○後撰集ゐ櫻川と云所有ときゝて云々紀貫之常よりも春べにおれむ櫻川波の花こそ問おくよをちめとあり

子の名もさくら子にて。また此川もさくら川の。名も。おつかしき花の塵(おりゝ)を。あたにもせじと思ふおり。(狂女ノ語○神名子名川名各櫻ヲ愛出シテ愛慕ノ情更ニ油然)いそれをさゝゞ面白や。げに何事も縁ゐありけり。「さばかり遠き筑紫より。この東路(あづまぢ)の櫻川まて。下りぬふも縁よおう(僧ノ語)まつ此川の名に負ふこと。遠きにつゝての名譽あり。かの貫之が哥ゐいかに。(狂女ノ語)實に〳〵昔の貫之も。はるゝき花の都より。いまた見もせぬ常陸の國に。名も櫻川有ときゝて。常よりも、春べにおれゞ櫻川。〳〵。波の花こそまおくよをちめ、と詠(ながめ)たれば。はなのゆきもつらゆきも。(花雪 貫之)

信太の浮島○信太の浮島い常陸國信太郡ニあり

ふるさ名のみ殘るよの。櫻川瀬々の白浪ゑげゝれべ。霞促がを信太の浮島の。うかべ〳〵水の花。げに面白き河瀬かおゝ。〳〵。一。僧ノ語ヨリ直ニ文辭ニ移ス いのに申し候この物狂ゝ。面白う狂ふと仰せ候が。今日ゝ何とて狂ひ候ゝぬぞ。僧ノ語 さむ候。くるゝをるやうが候。櫻川に花の散ると申し候へべ。狂ひ候ほとに。くるゝせて御目に懸けうぞるゝて候。僕ノ語 急いて惜くるゝせ候へ。僧ノ語 心得申し候。あら笑止や。俄に山風のして。櫻川に花の散り候よ。僕ノ語○一句前段櫻川によい花の散り候かニ應ス よしおきとをゆふ山風の。與おる花をさそふ御座めれ。流れぬさきに花をくゝむ。是狂女ノ謠

花のみかさゝ白妙の○みかさゝ水嵩おり白妙ゝ栲と云る物にて織たる白き布おり

花の本ゝ歸らん云々○白氏文集に花下忘歸因美景、樽前勸醉是春風ニ とあり

水流れ花落ちて云々○古詩ゝ水流花落春長在、月冷風高鵲不歸、とあり

岸花紅ゝ云々○杜子美の詩に岸花紅照水 洞樹翠含風、とあり

山花開けて云々 碧岩ゝ僧問大龍、色身敗壞、二

實に見れべ山おろしの。木々の梢に吹き落て。花のみかさゝ白妙の。浪かとみれべ上より散る。櫻か。雪か。波か。花らと。うきたつ雲の河風に散れべぞ浪も櫻川。〳〵。流るゝ花をそくもん。花のもとに。歸らんことを忘水の。雪を受けたる花の袖。それ水流れ花落ちて春とこしあへにあり。月冷しく風高かうして鶴かへらぬ。岸花紅に水を照らし。洞樹綠に風を含む。山花開けて錦に似たり。澗水湛へて藍のごとし。おもしろや。思てずこゝにうかれきて。名もなつかしみ櫻川の。一樹の蔭一河の流。汲みて去る名も所から。あひにあ

如何是堅固法身、龍云、山花開似錦、澗水湛如藍矣と、あり

年を經て○古今集に年を經て花の鏡とする水いちりかゝるをや曇るといふらんとあり

散ぬれい云々○古今集物名の部にちりぬれい役いあくたにする花を思ひ知らぎもまとふてふかなとあり

梢より云々○古今集ょ枝よりもあだよ散にし花なれむ落ても水の泡とおとなれとあり

先たゝぬ悔の八千度○

ひなゞ櫻子の。これまた他生の緣なるべも。實や年を經て、花の鏡となる水ゝ。散りかゝるをや曇るといふらん。まてと散りぬれゞ。後ゝ芥にする花と。思ひ知る身もさていかに。我も夢なるを、花のみと見るぞはかなさ。されゝ梢より。あたに散りぬる花なれゞ。落ちても水のあはれとゝ（泡哀ハアワレナレハ例ノ假字遣ヘリ）いざまら波の花にのみ。馴れしも今ゝさきたらぬ。悔のやちたび百千鳥。花にふれゆく仇し身ゝ。てかなき程に美まれて。霞をあゝれみ露をかなしめる心なり。さるにても。名にのみ聞きてゝる〳〵と。思ひ渡りし櫻川の。涙かけて常陸帶の。かことゞかりに散る花を。あだにふさゞと水をせき。雪をたゝへてうき涙の。花の柵（柵、籬）かなまくも。忝おしやてれとても。木花さくや姫の、御神木の花おれゞ。風もよぎて吹き、水も影を濁そなと、袂をひたし裳をぢぼらのして。花に寄邊の水せきとめて。櫻川にふさうよ。あたら櫻の〳〵と。ゝゝゝ散るぞ恨なる。花もうし、風もつらし。散れゝぞさそふ。誘へゞぞちる。花莫かけてのみ詠めしゝ。ふを青柳の糸櫻。霞のまにゝかは櫻。雲と見しゝみ吉野の。〳〵。川よどさざつ波の花をもくゝ、もしくず魚やかゝ

古今集ょ先たゝぬ悔の八千たび悲しきい流るる水の歸り來ぬるりとあり榮雅抄に後悔不立前、流水不歸源、ともあり

百千鳥云々○六帖に百千鳥花に馴れぬるあたしみいはかなき程にうちやまれぬるとあり

霞をあいれみ云々○古今集序に鳥をうらやみ霞をあいれみ露をかなしむ心ことゞ多くさまゞまなりにけるとあり

常陸帶の云々○新古今

集ニ東路の道のいてゝる常陸帯かことむかりも逢いんとぞ思ふとあり

花のえからみ○千載集に櫻ちる水の面にいせきとむる花のえからみかくべかりけるとあり風もよぎて○古今集ニ春風に花のあたりをよきてふけ心づからやうつちふと見んとあり

あたら櫻の○玉葉集に花見にと群れつゝ人の來るのみぞあたら櫻のとおにに有けるとあり

花もうし云々○雲玉集に花もうし嵐もつらし諸共に散れむぞ誘ふさそへむぞ散るとあり

霞の間にいかむ櫻○源氏野分帖ニ霞の間よりおもしろきかむ櫻の咲き亂れたるを見る心地す云々とあるにより

雲と見しい○古今集序に春のあした吉野の櫻いん丸が心にい雲かとのみゑんおぼえけり云々とあり

くぢ魚やかからまし○拾葉抄にくぢ魚い鮎也昔吉野の奥に國栖(クズ)人といふあり毎春天子へ若い、い、い、ちまし。また櫻魚と聞くもおつかしや。いつれも去ろたへの。花も櫻も雪も波もみながらに。をくひ集め。持ちたれとも。是ハ木々の花。まことハ我尋ぬる櫻子ぞ戀ひしき、わが櫻子ぞ戀ひしき。(狂舞旋轉恰モ花ニ狂フ蝶ノ如シ。一結)

其本心ヲ見ル いかにやいかに狂人の。言の葉さくハ不思議や。もしも筑紫の人やらん。(是櫻子ノ辭)今まてハ、誰ともいさやあらぬひの。筑紫人かとのさまふハ。何のお爲に問ひゐふ。(是狂女ノ辭)何をか今ハつゝむべき。親子の契り朽ちもせぬ。花櫻子ぞ御覽ぜよ。(櫻子ノ辭)櫻子と。〳〵。と聞けば夢かと見もあかぎ。いつれ我子あるらん。三年の日數ほとふりて。別れも遠き親と子の。もとの姿ハかとれとも。さそが見馴れし面たてを。よく〳〵みれば櫻子の。花の顔ばせの、てハ子ありけり驚の。逢ふ時もおく、音こそ嬉しき涙ぞりけれ(此子)(母子逢遇落花從枝)かくて伴なひ立ち歸り。〳〵。母をも助け樣變へて。佛果の緣とぞりにけり。二世安樂の緣深き親子の道ぞありがたき。〳〵。

櫻川ヲ把テ、櫻兒ニ配シ、終始落花ヲ惜ムノ意ヲ述ヘテ、子ヲ戀フノ情ヲ叙ス、哀慕凄切、尤モ真摯ノ情ヲ極ム、カノ柏崎、斑女、三井寺、隅田川ノ諸曲、

菜又鮎の魚を奉りしなり依て鮎を國栖魚といへりとあり

櫻魚○同書ニ此も鮎なり櫻のさく頃の小鮎を云と見えたり

みるめおちに○みるめからい皆るめおちの略言なり

ちらぬ火の○ちらぬ火い筑紫の冠辭なり

子い子なりけり○續世藏に親の親ニ今いにかしき神鳥早鷺の子い子なりけりといふ歌によれり

二世安樂の緣○現當二世安樂をいふ安樂國い彌陀の淨土なり

皆是同思構ナレトモ、ソノ幽艶ニ至テハ、終ニコノ曲ニ及ハス、

熊野

熊野一ニ湯谷ニ作ル、字音ニ訓ムナリ、本曲ハ平家物語ノ事實ヲ布衍シテ作レルナリ、同書、重衡東下ノ條ニ、本三位の中將重衡の卿をば、鎌倉の前の右兵衛の佐頼朝、頻に申されければ、さらば下さるべしとて、土肥の次郎實平が手より、九郎御曹子の宿所へ渡し奉る、同じき三月十日の日、梶原平三景時に具せられて、關東にこそ下られけれ、（中略）池田の宿にも着き給ひぬ、彼宿の長者熊野が女侍從が許に、その夜い宿せられけり、侍從三位の中將殿を見奉

りて、日比ゝつてにたに思し召し寄り給ゝぬ人の、今日かゝる所へ入らせ給ふことの不思議さよとて、一首の歌を奉る、

旅の空はにふの小屋のいぶせさに、故郷いかにこひしかるらん、中將の返事に、

故郷も戀ひしくもあし旅の空、みやこもつひのをみかあらねて、や、ありて中將、梶原を召して、さても只今の歌の主ゝ、いかなるものぞ、やさしくも仕りたるものかな、とのたまへば、景時畏りて申しけるゝ、君ゝいまた知し召され候へぞや、あれこ

そ屋島の大臣殿の、いまた當國の守にて渡らせたまひし時、召され參らせて、御寵愛候ひしに、老母をこれに止め置き、常ゝ暇を申し、かども、たまはさりけるば、頃ゝ三月の始ゝてもや候ひけん、

いのにせん都の春ゝ惜しけるとと、馴れしあつまの花や散るらん、といふ名歌仕り、暇賜りて罷り下り候ひし、海道一の名人ゝて候ふ、とぞ申しける、

トアリ、原書ニハ宗盛ノ寵愛セシ女ハ、熊野ノ女侍従トアレト、本曲ニハ直ニ母ノ名ヲ取リテ女ノ名セトリ

平の宗盛○内大臣從一位平宗盛世に八島の大臣と稱を太政大臣清盛の二男元暦二年三月西海にて生虜となり同六月近江國篠原にて殺さる

池田の宿の長を云々○池田宿は遠江國天龍川の東にあり湯谷は母が名なり本曲は直は娘の名に作る

是は平の宗盛なり。さても遠江ノ國池田の宿の長をば、熊野と申し候。久しく都に留め置て候が、老母のいたてりとて、度々暇を請ひ候へとも。この春べからの花見の伴と思ひ、留め置て候、（一語全篇ノ伏線タリ）いかに誰かある。

（是宗盛ノ語）御前に候（是家人ノ語）熊野参りてあらは、こなたへ申し候へ。（宗盛ノ語）長つて候（家人ノ語）夢のまをしき春なれや。咲く比花を尋ねん。是は遠江ノ國池田の宿。長者の御内に仕へ申そ。槿と申そ女にて候。さても熊野久しく都に御入り候が。此程老母の御痛はりとて。度々人を御上せ候へとも。更に御下りもなく候程に。此度は槿

が御迎に上り候。（是槿ノ語）此程の、旅のころものひもそひて。〳〵幾夕暮の宿おらん。夢も數そふ假枕（現在）。あかし暮して程もおく。都にむやく着きにけり。〳〵急ぎ候程に。是はそや都に着きて候。是ぞ御内が。熊野の御入り候所にて有げに候。まつ〳〵案内を申さばやと思ひ候。いかに案内申し候。池田の宿より槿が參りて候。それ〳〵御申し候へ（槿ノ語）草木は雨露の恵み。養ひ得ては花の父母たり。況や人間に於てをや。あら御心もとなや。何とか御入り候らん。（是熊野獨母ノ病ヲ思フノ語）池田の宿より。槿が參りて候。（槿ノ語）なに槿と申そかあら珍ら

しや。さて御痛はりい何と御入りあるぞ（熊野ノ語）以外に御入り候。是ゴ作文の候。御覧候へ。（權ノ語）あら嬉しや。まつ〳〵作文を見うぞるにて候。あら笑止や。此作文のやうも頼みまくなうみえて候。（熊野ノ語）さやうに御入り候。（權ノ語）此上い權を。もつれて參り。又此文を。も御目に懸けて。御暇を申さうぞるにてあるぞ。こなたへ来り候へ。誰か渡り候。（熊野ノ語宗盛ニ辭ス省ノ暇ヲ請フナリ）や。熊野の御參りにて候（家人ノ語）妾が參りたる由御申し候へ。（熊野ノ語）心得申し候。いかゴ申し上候。熊野の御參りにて候。（家人ノ語）此方へ来れと申し候へ。（宗盛ノ語）畏て候。此方へ御參り候へ。（家人ノ語）いかゴ

末世一代教主の如來も○教主い釋迦如來をいふ釋尊も入滅い遁れぞとて母の病の事をいひ出すあり

年ふりさらぬ朽木櫻○續千載集よいかにせん朽木の櫻老ぬとて心の花い知る人もなしとあり

今年むかりの云々○新千載集ゴ折ふもあれ心つくしにまたれぞむ今年むかりの花い見てましとあり

申し上候。老母の痛いり以外に候とて。此度い權に文を上せて候。便なう候へとも。そと見參に入れ候べし。（熊野ノ語）何ぞ故郷よりの文と候や。見るまてもあし。それにてたからかに讀み候へ。（宗盛ノ語）甘泉殿の春の夜の夢。心を碎く端とふりっ驪山宮の秋の夜の月。をむりなさにしもあらず。末世一代教主の如來も。生死の諦をべ。道れ給いず。過にし二月の比申しごとく。何とやらん此春い。年ふりまさる朽木櫻。ことしべのりの花をたに。待ちもやせしと心よわき。老の驚あふことも。なみたにむせぶばかりなり。唯然るべくいよき様に申

親子は一世○法苑珠林に父母之恩云何可報云々一世之恩尚復難報とあり

老ぬれはさらぬ別の云々○伊勢物語に載せたる業平朝臣の母の歌なり

在原の業平○業平は従四位上左近衛權中將兼美濃守なり父は平城天皇の皇子阿保親王母は桓武天皇の皇女伊登内親王なり

長岡○山城國乙訓郡なり

さてこそ業平も○伊勢

し。去ばしの御暇を給りて。今一度まみえおはしませ。さなきだに。親子は一世のおかなるに。同じ世にだにそひ給はずは。孝行ももつれぬふへし。唯返を〳〵も命のうちに。今一たび見參らせたくこそ候へとよ。老ぬれば。さらぬ別のありといへば。いよ〳〵見まくほしき君かな。と古事まて〻思ひ出の。涙ながら書さ留む。是老母ノ消息文ナリ字々眞情

そも此哥と申をは。〳〵。在原の業平の。其身は朝に隙なさを。長岡に住み給ふ。老母のよめる哥なり。さてこそ業平も。さらぬ別のおくもがな。千世もと祈る子の爲と。讀みしことこそあはれな

物語はかの子はたう泣きてよめる、世の中にさらぬ別の無くもがな千世もと祈る人の子の爲とあり子とは業平をいふ

牛飼車寄せよとて○牛飼は車の牛を使ふ舍人にてたの車は即ち牛車なり

れ。〳〵。古歌ノ注解ヲ押ミテ消息ノ文意ヲ助ク是地ナリ今はかやうに候へば。御暇を賜はり。東ふ下り候べし。是熊野ノ語老母の痛はりはさることなれども。さりながら。此春ばかりの花見の友、いうてあ見捨てぬふべき、是宗盛ノ語首段ニ照應ス御言葉をかへせは恐れなれども、花は春あらば今に限るべからず、是はあたなる玉の緒の、長き別となりやせん、唯御暇を賜はり候へ。熊野ノ語○一語無限ノ感慨アリいや〳〵さやうに心弱き身に任せては計ふまじ。いかにも心を慰めの。花見の車同車にて。ともに心を慰まん。宗盛ノ語と牛飼車をよせよとて。〳〵。是も思ひの家のうち。てや御出とをいむ

足弱車○河海抄ニ輪のかよわき車也とあり
名も清き水のまに〳〵○清き水ハ清水寺ニ云かけたり水のまま〳〵ハ古今集ニ花ちれる水のまに〳〵とめくれハ山ニハ春もなくなりにけりとあるふよれり
音羽山○山城ニあり今牛尾山といふ
春前に雨有て○百聯抄解詩ニ春前有雨花開早秋後无霜葉落遲、とあるを其まゝとれり
山外に山有て○同書ニ外山有山山不盡路中多路路無窮とあり
山青く山白くして○同書ニ山青山白雲來去人樂人愁酒有无とあり
六波羅の地藏堂○伊呂波字類抄ニ六波羅密寺空也上人應和年中所草創也とあり
闡提救世の方便○闡提ハ大惡不信の人をいふかゝる大惡人も觀音の慈悲にて救ふとなり
たちちね○父母の枕詞なれとおゝハ直ニ母のことをいふ
をたぎの寺○愛宕寺ハ今の六道なり

れと。心ハさきに行き無ぬる。足弱車の力なき花見おりけり一。心コヽニ在ラス無碍ノ真情一句寫シ得テ妙名も清き水のまに〳〵とめくれば。何ハ音羽の山櫻。あつま路とても東山。せめてそなたのあつのしや。春前に雨あつて花の開くるとと早し。秋後に霜なうして落葉遲し。落葉ハ前ニ樹シテ葉落る遲シトヨム山外に山あつて山つきぞ。路中に道おほうして道窮りなし。山青く山白くして雲來去も。人樂み人愁ふ。是皆世上の有樣なり。誰かいつし春の色。實に長閑なる東山。四條五條の橋の上。〳〵。老若男女貴賤都鄙。色めく花衣、袖をつらねてゆくそなの。雲かとみえて

八重一重。さく九重の花盛。名におふ春の景色かな。〳〵。河原おもてを過ぎ行けハ。急ぐ心の程もあく。車大路や六波羅の。地藏堂よと伏し拜む。觀音も同座あり。闡提救世の方便あらたに。たちちねを守給へや。實にや守りの末そくに。願む命ハあら玉の。をたぎの寺も打過ぎぬ。六道の辻とかや。實におそろしや此道ハ。冥途に通ふるものを。心ぼそ鳥部山。煙の末も薄霞む。聲も旅雁の横たはる。北斗の星の曇なき。御法の花も開くなる。經書堂ハ是かとよ。そのたちちねを尋ぬる。子安の塔をそきゆけハ。春の隙ゆく駒の道。は

六道の辻○昔小野篁此寺より冥途へ通ひしといへり此傳説によりてかけり

鳥部山○東山にあり

放雁の横たむる云々○朗詠集に北斗星前横放雁南樓月下擎寒衣とあり

經書堂○清水坂の北側

優婆堂の前にありて來光院と號す

子安の塔○泰産堂と號す源平盛衰記に坂上田丸女(嵯峨帝妃)御懐妊の時御産平安ならむ我氏寺に三皇の塔を額まんと御願を被立たり其驗にや平かに皇子御誕生あり云々とあるこの子安の塔なり

車宿り馬止め○泰産寺の西門の下なる階の北にあり

車おりゐの衣云々○此所へ播磨を取出をい播磨に飾磨といふ郡ありて褐(カチ)の染物を出す又清水寺に鹿間塚といふあり て同し訓ゐれむかく續けたりされむ車をりおりゐとつゞけて下來の意にかけたり

花前蝶舞云々○百聯抄

や程もなくこれそこの車宿り馬留め。こゝより花車、おりゐの衣たりまがた。去かまのかち路清水の(車ヨリ下リヲ 張、塩濃 飾磨、鹿間 褐、徒行)

織ニカケ衣ヲ張リヲ播磨ニカケ飾磨ヲ鹿間ニカケ褐ヲ歩行路ニカリ兼詞層々愈出テ、愈妙蓋シ褐ハ播磨國飾磨郡ノ名産而レテ鹿間歩行路ハ共ニ東山ニアル地名ナリ

佛の御前に念誦して、母の祈誓をやさん。(東山花ヲ觀ル熊野其意ニアラス佛前母ノ癒病ヲ祈ル是其本心一結奇警○此段是一篇ノ東山名所記)

いかに誰かある(宗盛ノ語)御前にいゝ(家人ノ語)何と(熊野)ゐ遅ふたりたるぞ。急いて此方へとやしいへ。(宗盛ノ語)畏ていい。いかに權にやしい。たや花の下の御酒宴のたしまりていい。急いて御參りあれとの御事にていい。其由仰られいへ。(家ノ語)心得やしい。いかにやしい。たや花の下の御酒宴のたしまりていい。急いて御參りあれとの御事にていい(權ノ語)何と、たや御酒宴のはしまりたるとやそか。(熊野ノ語)さむい、(權ノ語)さらた參らうするにていい。なう〳〵皆〻近う御參りいへ。あら面白の花やいい。今を盛とみえていに。なにとて御當座おとをも遊いされいいゐぞ。(熊野ノ語)實や思ひ内にあれゞ。色外に顯るのよしやよしなき世のおらひ。歎きても又餘りあり。花前に蝶舞ふ、紛々たる雪。柳上に鶯飛ぶ、片〻たる金。花い流水に隨つて香の來ること疾し。鐘い寒雲を隔て、声の至ること遲し、清水寺の鐘の聲。祇園精舎を現し。諸行無常の声やらん。地主權現の花い色。

餅の詩より本文花間とあり

花隨流水云々○作者未考

祇園精舎云々○往生要集ノ諸行無常云々寂滅爲樂祇園寺無常堂四角在頗梨鐘鐘中亦説此偈矣とあり

地主權現○清水寺奥院にあり今地主神社といふ祭神大國主神なり

娑羅双樹○西域記に其樹類栴檀皮青白葉甚光潤四樹特高云々とあり

鷲の村山○大笠の霊鷲山をいふ

娑羅双樹のことわりなり。生者必滅の世のおらひ。實にためしある粧ひ。佛も本ゝ捨てし世の。半ゝ雲に上見えぬ。鷲のお山の名を殘す。寺ゝ桂の橋柱。立ち出て峯の雲。花やあらぬ初櫻の。祇園林、下河原。南を遥にながむれば。大悲擁護のうそ霞。熊野權現のうつりまを。御名も同し今熊野。稲荷の山の薄紅葉の。あをかりし葉の秋。又花の春ゝ清水の。唯頼め、たのもしき春も千々の花盛。山の名の、音羽嵐の花の雪。深さなさけを人や知る。花トイフヨリ音羽嵐トイヒ花の雪トイフ語次第アリ妄御杉に參りしへし。熊野ノ語いかに熊野一さし舞ひしへ宗盛ノ語深さ情を

寺は桂の橋柱○桂橋寺とて往昔下河原にあり或年洪水に流れて退轉せりと云ふ

熊野權現の移ります○ゆやゝ熊野の字音を以て此女の名れ同訓とせしなり新熊野ゝ百錬抄に應保元年十月十六日奉移熊野御体於新造社壇今熊野是也後白河御願也とあり

あをかりし葉の○古今等問集和泉式部か歌ゝ時雨するいなりの山のもみぢ葉ゝあをかりしより思ひそめてきとあ

人や知る。おう〳〵。俄に急雨のして、花を散し候。いかに、熊野ノ語句長是傷心ノ語實に〳〵叢雨の降り来つて花を散しゝよ。宗盛ノ語あち心なのむら雨やな。春雨の、ふるゝなみたか。〳〵櫻花。散るをを去まぬ人やある。熊野ノ辭よしありげなる言葉の種宗盛ノ語とりあけ見れゝ。いかにせん都の春も惜けれと、あれし東の花やちるらん是熊野ノ歌詞本曲全ク此一節ノ首ヨリ成リ來ル實に道理なり、あはれなり。とや〳〵、暇とらそるぞ。東に下りゝへ。宗盛ノ語なに、御暇といや。熊野ノ語おか〳〵のことと〳〵下り給ふへし。宗盛ノ語あら嬉しゝや、たうとやな。是觀音の御利生なり。是まてなりや

るをとれり
春雨の降ハ○古今集に
春雨のふるハ涙か櫻花
ちるを惜まぬ人しなけ
れむとあり
關のとざし○とざしは
關の木なり倭名抄云野
王按局戸扇鉄鈎所用於
内以關門也和名度佐之
とあり

嬉しやな。是まてなりや嬉しやな。かくて都に御供せば。又もや御意のかゝるべき。たゝ此まゝに御いとまと。ゆふつげの鳥が啼く。東路さして行く道の。やがてやそらふ逢坂の。關の戸さしも心して。あけゆく跡の山見えて。花を見捨つる鴈金の。それハ越路、我ハ又。東に歸る名殘かな。〈花見ヲ以テ起シ花を見捨つるヲ以テ結フ一結悠然餘情盡キス〉

都ノ春モ惜シケレトノ一首ノ歌ヲ以テ、一篇ノ曲ヲ起シ来ル、閑雅優麗、カノ幽靈ヲ假リテ、強ヒテ一曲ノ脚色ヲナスモノトハ、真ニ雅俗ノ差アリ、謡曲中ニ在リテハ、蓋シ有數ノ筆ナリ、

融

融ハ、嵯峨天皇第十二ノ皇子、下リテ源姓ヲ賜フ、從一位左大臣トナリ、寛平七年八月廿五日薨ス、世ニ河原左大臣ト稱ス、愚管抄ニ、河原左大臣、六條河原にいみしき家つくりて、池を堀り水をたゝへて、毎月潮三十石バかりてこび入て、海底の魚貝等をもましめたり、陸奥國塩竈の浦をうつして、海士の塩屋に煙をたて、もてあそれ々るとおん、東六條院と云所あり、伊勢物語集注ニ日々に難波より潮をくみてこびしあり、是により攝州尼崎より

十五町西の方に、東新田といふ村の道ばたに、融大臣の社あり云々、本朝文粹ニ、夫河原院者、弘仁先朝第十二皇子、左丞相融卿之甲第也、相府在世之間、窮風流之体、擅遊蕩之美、疊山累巖、草水比其枝、鑿池湛水、魚鳥戲其波、調管絃於仙臺、翫文籍於月殿、寛平法帝脫履之後、遊覽焉勝地、再逢主幽、境重得時、厥後早改蓮府之号、爲花界之砌、トアリ、コノ河原院ハ、拾芥抄ニ、河原院、六條坊門南、万里小路東八町、融大臣家、後寛平法皇御所、本四町京極西、号東六條院、トアリ、サテ融ノ幽靈ハ、敢テ作者ノ

虛構ニハアラデ、基ケル所アルナリ、ソハ文粹ニモ、再逢主幽トアリテ、今昔物語ニ、大臣(オト)せ玉ひてのち、宇多院ハ此河原院にをませ玉ふ、ある夜西の對の塗籠(ヌリコメ)をあけて、人の參るやうにおぼして、見させ玉へハ、緋の裝束したる人の、太刀(タチ)てき、笏取て、二間はかり退きて畏(カシコマツ)て居たり、あれハ誰と問てせ玉へハ、爰の主に候翁なりと申を、融大臣かと問はせ玉へて、ゑかに候、此所ハ我家なり、院こゝに住み玉ふがゆゑに、所せくなり、いかゝをへからんと申せハ、院聞召、我おし取て居さらてこそあらめ、

千里も同し云々○老子に千里之行始於足下とあり

おとゝの子孫の我ゝくれたればこそ、此所にをむなれ、いかにかくて恨むるぞ、と高やかに仰せられければ、かいけをやうに失せぬ、トアリ、

是ゝ東國方より出たる僧にてゝ。我いまた都を見ぞゝ程に。此度思ひ立ちゝ。都に上りゝ。（是僧ノ語）思ひたつ、心ぞゝるべ雲を分け。舟路をわたり山を越え。千里も同し一足に。〳〵。夕を重ね朝ごとの。〳〵。宿ゝ名殘もかさなりて。都にてやく着にけり。〳〵。（千里ノ行程輕々敷シ去ル）急ぎゝ程に。是ゝてや都に着てゝ。此あたりをば、六條河原院とやらん申しゝ。暫休らひ。一見せばやと思ひ

陸奥ゝいつくゝあれと塩竈の○古今集大歌所の哥にて下句浦漕く舟の綱手かなしもとあり

水の面に照月なみをかそふれゝ○拾遺集源順の歌なり

（僧ノ語）ゝ月もてや、出塩になりて塩竈の。浦さびわたる景色かな。陸奥ゝ。いつくゝあれと塩竈の。うらみてわたる老が身の。よるべもいざや定めなき。こゝろもそめる水の面に。てる月なみをかぞふれゝ。今宵ぞ秋の冨中なる。實にやうつせば塩竈の。月も都のもなかかな。秋ゝなかば身ゝ既に。老い重りて諸白髮。雪とのみ、積りそきぬる年月の。〳〵。春を迎へ秋をそへ。ぎぐるゝ松の風までも。我身の上と汲みてゝる。塩なれ衣袖寒き。浦洄の秋のゆふへかな。〳〵。（數景第一段）いかに是なる尉殿。御身ゝ此あたりの人か（僧ノ語）さんゝ。此

千賀の塩竈を云々○續後拾遺集詞書ニ河原左大臣の家にまかりて侍けるに塩竈といふ所のさまを作れりけるを見てよめる業平（歌略）とあり今五條高倉ニ塩竈町あり其邊慥て此舊地なり

籬か島○奥州の名所にて汐竈の浦にあり

所の塩汲（しほくみ）にていひ（是尉ノ語）ふしぎや爰（こ）ゝ海邊にてもなきに。鹽汲といゝ誤りたるか尉殿。（僧ノ語）あら何ともあや。さて爰をばいつくとゐろしめされていぞ。（尉ノ語）此所をゝ六條河原院とこそ承りていへ。（僧ノ語）河原院こそ塩竈の浦いよ。融大臣陸奥の千賀の塩竈を、都中に移されたる海邊なれゝ。名に流れたる河原院のゝ河水をも汲め、池水をもくめ。こゝ塩竈の浦人おれゝ。塩汲となどおぼさぬぞや。（尉ノ詞）實に〳〵陸奥の千賀の塩竈を。都の中に移されたること。承り及ひていゝ。さてゝあれおるゝ籬（まがき）が島いか。（僧ノ詞）さんいゝ。あれこそ籬が島いよ。融大

島の宿し轉りて云々○詩人玉屑ニ賈島初赴舉在京師一日於驢上得句云鳥宿池邊樹、僧敲月下門、始欲着推字又欲着敲字煉之未定遂於驢上吟哦時々引手作推敲之勢時韓退之東部權京兆島不覺衝至第三節左右擁至尹前島具對所得詩句云々韓立馬良久謂島曰作敲字佳矣遂與並轡而歸とあり以下凡て此義ニよりてかけり又三体詩ニ五湖歸去孤舟月とあり

臣常ゝ御船をよせられ。御酒宴の遊舞（あそびまひ）。さま〳〵あり し所ぞかし。や。月こそ出ていゝへ。（尉ノ語月出一句毎精采アリ）實に〳〵月の出ていぞや。あの籬が嶋の森の梢に。鳥の宿し轉（しゝつ）り て。四門にうつる月影まても。孤舟に歸る身の上か。と思ひ出られていゝ。（僧ノ語）何と唯今の面前の景色が御僧の御身に知らるゝとゝ。もしも貴嶋か言葉やらん。（尉ノ語）島ゝ宿を池中の樹。僧ゝ敲く月下の門。推も敲くゝ古人のこゝろ。今目前の秋暮にあり。實やいにしへも、月にゝ千賀の塩竈の。〳〵。浦洄の秋もなかて。松風も立つなりや。霧の籬か嶋かくれ。いざ我

もたちわたり。昔の跡をみちのくの千賀のうらわを詠めむや。千賀のうらわを詠めん。（見ル陸奥）

一（寂景集二段）塩竈の浦を。都の中にうつされたるいとれ。御物語りいへ。（是僧ノ語）嵯峨の天皇の御宇ぉ。融大臣、陸奥の千賀の塩竈の眺望を聞召し及ばせぬひ。此所に塩竈をうつし。あの難波の御津の浦よりも。日毎に潮を汲ませ。妥にて塩を焼せつゝ。一生御遊の便としぬふ。然れとも其後ハ相續して。もてあそぶ人もおければ。浦ハそのまゝ干塩と成て。池邊によとむたまり水ハ。雨の殘りのふるさ江に。落葉散り浮く松蔭の。月だにそまで秋風の。音の

君まさて煙絶にし（古今集賀之か哥おり詞書ヨ河原の左のおほいまうち君の身まかりて後彼家ヨまかりて有けるに塩竈と云處の様を作れりけるを見てよめるとあり

み殘るばかりおり。されハ哥にも君まさで、煙絶えに。塩竈の。浦さびしくも見えわさるかな。（河原院ノ寂景唯此一首ヨリ載行シ來ル）と賀之も詠みていハ實やながむれハ、月のみみてる塩がまの浦さびしくも荒れ果づる。跡の世までも去ほしみて。老の涙も返るやらん あら昔戀ひしや。戀ひしやこひしやと。慕へとも歎けとも。かひもおぎさの浦千鳥。音をのみ鳴くばかりおり。〈〉。（是尉ノ詞〇寂景集三段〇段無詞）

（ヲ逸フテ塩竈ノ寂寞ヲ敘シ末段河原院ノ繁華ニ反照ス）いかに尉殿見え渡りたる山々ハ。皆名所ヨてぞいらん。御教へいへ。（僧ノ語）さんいゝみな名所にていハ。御尋ねいへ。教へやしいハん。（尉ノ語）まつあれ

音羽山音にき、つゝ○古今集元方の歌あり結句年を經るかなとあり歌の中山清閑寺○宗祇名所集ょ清水寺の南に歌の中山といふ所あり云々清閑寺ゝ拾芥抄に清閑寺佐伯公行建立とあり

紅葉も青き稲荷山○古今著今集に時雨せし稲荷の山のもみち葉ゝあをかりしより思ひそめてきとある歌の意によれり

に見えたるゝ音羽山いか。僧ノ語さん候。あれこそ音羽山候よ。尉ノ語音羽山音に聞きつゝ逢坂の。關の此方ゐと讀みたれゝ。あふ坂山も程近ふこそ候らん。僧ノ語仰のごとく。關のこゐたにとゝ讀みたれとも。あなたに當れゝ逢坂の。山ゝ音羽の峯に隠れて。此邊よりゝ見えぬなり。尉ノ語さて〳〵音羽の峯つゝき。次第〳〵の山なみの。名所〳〵を語りゐへ。僧ノ語語りも盡くさし言の葉の。哥の中山清閑寺。今熊野とゝあれぞかし。尉ノ語さて其末につゝきたる。里一村の森の木立。僧それをゝ見るべに御覽ぜよ。またきゐぐれの秋なれゝ。紅葉も

藤の森○伏見の北にあり

夕されば野邊の秋風云々千載集俊成の歌にて結句深草の里とあり

木幡山伏見竹田淀鳥羽○何れも京都より南つゝきの所あり

大原や小塩の山○大原野ゝ乙訓郡に小塩山ゝ其大原にあり今古集に業平、大原や小塩の山もけふこそゝ神代の事も思ひ出らめとあり

青さ稲荷山。尉風も暮れ行く雲のもの。梢もあをき秋の色。僧今こそ秋よ名にし負ふ。春ゝ花見し藤の森。尉緑の空も蔭青さ。野山につゝく里ゝいに。僧あれこそ夕されば。野邊の秋風身にきみて。鶉鳴くなる深草山よ。尉木幡山、伏見の竹田、淀、鳥羽も見えたりや。尉詠めやるそなたの空ゝきら雲の。僧ぞ暮れそむる遠山の。嶺も木深く見えたるゝ。いかゐる所ゐるらむ。僧あれこそ大原や、小塩の山もけふこそゝ。御覽じそめつらめ。おほゝ〳〵問てせぬへや。尉聞くにつけても秋の風。吹く方あれや嶺つゝき。西に見ゆるゝいつく

松の尾○葛野郡にあり興ゝ乘じて身をハ實に忘れたり○廬山惠遠法師の許へ陶淵明陸修靜訪ひ來しに惠遠法師興に乘じて禁足を忘れ二人を送り出て虎溪を過きたりといへる事あり此故事を思ひて實にといいへるなり

田子の浦○駿河國にあり

あつまからけの塩衣○新後拾遺集に賤の女が吾嬬からげの麻衣二股河をさゞ渡るらんとあり

ぞ僧秋もてや〳〵。ふかハ更け行く松の尾の。嵐山も見えたり。嵐、更け行く秋の夜の。空澄み上る月影に。さを塩時もてや過ぎて。隙もをしてる月にめて。興に乘じて身をハげに。忘たり秋の夜の。長物語よしあや、まついざや塩をくまん尉とてもつや田子の浦。吾妻からげの塩衣。くめ〳〵月をも袖にもち。塩の汀に歸る。涙の。よるの老人と見えつるか。塩曇にかきまぎれて跡も見えぞかりまけり。跡をも見せぞなりにけり一潮汲

ノ老翁杳然トシテ去ル○六條ヨリ眺望スル東西ノ風景ヲ象シテ現幽寂嘩ノ間ヲ繁ク

きて。〳〵。岩根の床に夜もそがら。なほも奇特をみ

袖にもち塩の○望の日の塩をもち塩といふなり草根集に鳴の海や望塩からぬ涙の上にこよひ滿たる月の影かなともよめり

汐曇り○汐のさし來る時空の曇るをいへり遺院家集に霄の闇の月に愛かりし塩曇り晴るゝ干潟に更る影かなともよめり

月宮殿の白衣の袖云々前篇羽衣に註を

光りを花と○古今集に秋來れい月の挂のみやいなる光りを花とちら

。。。。。るやをて。夢待ちがほの旅寐あか。〳〵。旅僧ヲ卧セシメテ一更ニ融大臣ヲ喚ヒ

起ハ夢待顔ノ一句押ミ得テ妙

返る涙の。みつ塩竈の浦人の。こよひの月をみちのく見ハ林美

の千賀の浦洄も遠き世に。其名を殘そまうちぎみ。融大臣とい我事なり現ノ尉即幽ノ大臣あれ塩竈の浦に心を寄せ。あの籬が島の松蔭に。明月に舟を泛べ。月宮殿の白衣の袖も。三五夜中の新月の色。ちゑふるや、雪を廻らを雲の袖。さそや桂の枝々に。光を花とちらを粧ひ。愛にも名に立つ白川の涙の。あら面白や曲水の盃。うたたり〳〵遊舞の袖。あらおもしろの遊樂や。そも明

すいかりぞとあり
爰にも名に立つ白河の
○白河い山城國愛宕郡にあり陸奥にも有る故に爰にもといへり
青陽の春の初にい云々
○梁武帝纂要に春曰青陽とあり遠山黛い白氏文集に宛轉双蛾遠山色とあり三日月を舟に譬ふるい百聯詩に月送天涯猶去舟とあり
水中の遊魚い云々○明大祖詩に雜將王瓜指長空、萬里山河一樣同、映水有鈎魚袂鈎、啣山無箭鳥疑弓とあり

月の其中に。また初月のよひ〳〵に。影も姿もをくるきい。いかなるいとれなるらん。それい西岫に。入日のいまた近けれい。其影に隱さるゝ。たとへば月のある夜い。星の薄さがごとくなり。青陽の春の始にい。霞む夕の遠山。黛の色にみか月の。影を舟にもたとへたり。また水中の遊魚い。釣びりと疑ふ。雲上の飛鳥い。弓の影ともおとろく。一輪も降らぎ。萬水も昇らず。鳥い池邊の樹に宿し。魚い月下の波に伏ぎ。聞くともあのし秋の夜の。鳥も啼き、鐘も聞えて、月もて。影傾きて明方の雲とおり雨となる、この光陰にさ。

一輪も下らぎ云々○刊定記に一月不降百水不昇とあり
雲とおり雨とおる○巫山神女の古事おり宋玉高唐賦に旦爲朝雲暮爲行雨とあり

それて、月の都に入りぬふよそほひあら名殘をしの面影や、おぢりおしの面影 末段カヲ倒ノデ河原院ノ繁華ヲ叙シ以テ前段ノ寂寞ニ照應ス○一結

悠然餘情限ナシ

現ニ在テハ却テ寂寞ヲ寫シ幽ニ在テハ更ニ繁華ヲ寫ス局面顛換意匠最妙ナリ

蟬丸

蟬丸ハ延喜帝ノ皇子ナリトイフ說、古來アレト、妄說ナリ、今昔物語及ヒ東齋隨筆ニハ、蟬丸ハ式部卿敦實親王（宇多天皇ノ皇子）ノ雜色、盲目ニテ琵琶ヲ能クセ

シ由、記シタリ、サレト或説ニハ、後撰集ニ、是やこのトイヘル歌ノ詞書ニ、相坂の關にてゆき、の人を見てトアルニ依リテ、宵目ニアラズトセリ、又本曲蟬丸ノ姉君ニ、坂上トアルハ、是全ク作者ノ構造ナリ、逢坂トイフヨリ、強ヒテ此姉君ヲ作リシモノナルヘシ、而ノ其逢坂ニ訪ヒ来ツルハ。全ク博雅三位ノ故事ニヨリタルナリ、今昔物語ニ、今昔源博雅朝臣といふ人ありけり、延喜の御子の兵部卿の親王と申す人の子あり、万の事やんごとなかりけり、中にも管絃の道にぞむ極たりける、琵琶をぞ微妙

に彈きけり、笛をぞ艶に吹きけり、此人村上の御時ぞ、殿上人にてありける。其時に、會坂の關に一人の宵、庵を造て住みけり、名をば蟬丸とぞいひける、これは敦實と申しける式部卿の宮の雜色にてぞむありける、其宮は宇多の法皇の御子にて、管絃の道に極りなる人あり、年来琵琶を彈き玉ひけるを、常に聞きて、蟬丸琵琶をなむ微妙に彈く、而る間、此博雅此道を強に好て求めけるに、彼の會坂の關の宵、琵琶の上手なる由を聞きて、彼の琵琶を極て聞かまほしく思ひけれとも、宵の家異様なれば行か

そして、人を以て内々に蟬丸に云せけるやう、何と思ひ懸けざる所にゝ住むぞ、京に来ても住めかしと盲これを聞て、其答をゝ爲もして云く、

世の中ゝとてもかくてもをこしてむ、言もあらやもてしなけれゝ、と使返て此由を語りければ、博雅これを聞て、極く心憎く思えて心に思ふやう、我強に此道を好むに依て、必此盲に會ゝむと思ふ心深く、盲命あらむことも計り難し、亦我も命を知らず、琵琶は流泉啄木といふ曲あり、此ゝ世に絶えぬへきことなり、只此盲のみこそ此を知りたるなれ、

かまへて此か彈くを聞かむと思ひて、夜彼の會坂の關は行きにけり、然れとも蟬丸其曲を彈くことおかりけれゝ、其後三年の間、夜々會坂の盲が庵の邊に行て、其曲を今や彈く、今や彈く、と竊に立聞けれとも、更に彈かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうゝ曇りて、風少し打吹きたりけるに、博雅、あれ今夜ゝ興あるか、會坂の盲、今夜こそ流泉啄木ゝ彈くらめ、と思ひて會坂に行て、立聞けるに、盲琵琶を掻き鳴して、物哀に思へる氣色あり、博雅これを極て嬉しく思ひ聞く程に、盲獨心

を遣て、詠して云く、

あふさかの關のあらしのてげしさに、あひてぞ居たるよを過をとて、とて琵琶を鳴をに、博雅これを聞て涙を流し、あてれと思ふこと限なし、盲獨言に云く、あてれ興ある夜かな、もし我ゴ非らぬ者や世にあらむ、今夜心得たる人の來かし、物語せむ、といふを、博雅聞て、音を出して、王城ゴある博雅といふものこそ此に來たれ、といひければ、盲の云く、かく申をい誰にゴおはを、と博雅の云く、我いおかゝの人なり、強に此道を好むに依て、此三年

定めなき世の云々○新古今集にあをか川あすの淵瀬を知らぬこを定なき世の頼なりけれとあり此歌ゴよりてかけり

延喜の第四の皇子○延喜い醍醐天皇の年號なる故にやかてこの天皇をさしてかく申をなり

酬ありける浮世かな○大集經に瘖瘂者誹謗中來盲聾者不信中來とある意なり

襁褓の中○襁褓いむつきと訓む小兒の衣なり

淮南子に成王幼有襁褓

此庵の邊に來つるに、幸に今夜汝に會ふ、と盲此を聞て喜ぶ、其時に博雅も喜びなから、庵の内ゑ入て互に物語なとして、博雅、流泉琢木の手を聞かむ、と云ふ、盲故宮いかくなむ彈き玉ひし、とて件の手を博雅に傳へしめてける云々、トアリ、サテ今逢坂關ニ蟬丸大明神トテ社アリ、

定めなき世のなか〳〵に。うき事や頼みなそらん。次第是い延喜第四の御子、蟬丸の宮にておいしまを。

寶や何事も酬ありける浮世かな。前世の戒行いみじくて。今皇子といなり給へとも。襁褓のうちよりなと

之中とあり
蒼天は月日の光なく云々○蒼天は莊子は天之蒼々其正色乎とあり闇夜は云々は大平記は暗夜に燈消て五更の雨は向ふか如しともあり
逢坂山○山城と近江との堺にあり
御髪をおろし○髪を薙りて法師になるをいふ
綸言出て返らねむ○綸言は天子の號令なり漢書に號令如汗出不反者也とあり
浮木の亀の○阿含經に如大海中有一盲亀壽無量却百年一遇出于水面有一浮木只有一孔漂流海内隨浪東西盲亀一出擬値此孔穿頭向中其木西浮亀或東出圍繞亦爾雖復差違尚或相値とあり
清貫○延喜の時三好清行あり此人にあてたるか

やらん。兩眼盲ましまして。蒼天に月日の光なく。闇夜に燈火暗うして。五更の雨もやむことなし。明し暮させぬふところに。帝いかなる叡慮やらん。ひそかに具足し奉り。逢坂山に捨て置きやし。御髪をおろし奉きとの。綸言出て、かへらねゝ。御蒲ゝしさゝ限りなけれども。勅定なれば力なく。足弱車去のび路を。雲ゐのよそに廻らして。篠の目の、空も名殘の都路を。〳〵。けふいてぞめて又いつか。歸らんこともかた糸の。よるべなき身のゆくへ。さなきだに世の中ゝ。浮木の亀の年をへて。盲亀の闇路たどりゆく。迷ひの雲も

たちのぼる。逢坂山に着にけり。〳〵。（やがて蟬丸ヲ逢坂山ニ捨ツルコトヲ叙ス是主語）いかに清貫。（是蟬丸ノ語）御前に候（是清貫ノ語）さて我をべこの山に棄て置くべきか。（蟬丸ノ語）宣旨にて候ほどに。これまでゝ御供申して候へども。いつくに捨て置き申そへきやらん。さるにても我君ゝ。堯舜よりこのかた。國を治め民をあこれむ御事なるに。かやうの嚴慮ゝ何と申したる御事やらん。かゝる思ひもよらぬ事ゝ候ゝど。（清貫ノ詞）あら愚の清貫がいひごとやな。元來盲目の身と生るゝこと。前世の戒行拙きゆゑなり。されゝ父帝。山野に捨てさせぬふこと。御情なきにゝ似たるとと

后官髻を切り云々○后官は西施を云ふ越王勾踐の后ゴとして呉王へ行く時別に臨んで髻を切るといへる故事と聞えたり

雨にとるたみのゝ島と

○古今集に雨により田蓑の島をけふやけさ名にい隠れぬ物にぞありけるとあり

みさふらひ御笠と申せ

○古今集にみさふらひ御笠と申せ宮城野のゝ下露は雨に増れりとあり

つくからゴ千歳の坂も

○古今集ゴ千早振神のきりけんつくからに千歳の坂も越えぬへらるりとあり

逢るも知らぬも○後撰集に逢坂の関ゴ巷室を作りて住侍りけるに行かふ人を見て、蟬丸 是やゐの行くもかへるも別れつゝ知るも知らぬも逢坂の関とあり

行人征馬○本朝文粋源順の詩序に行人征馬騎驛於累廣之下とあり

も。此世にて過去の業障を果し。後の世を助けんとの御てかりごと。是こそ誠の親の慈悲よ。あら歎くまじの勅定やな。（蟬丸ノ詞）宣旨にて候程に。御髪をおろし奉り候。（清貫ノ語）是は何といひたることぞ。（蟬丸ノ語）是は御出家とて。めてたき御事にてわたらせ給ひ候。（清貫ノ語）賢や后官髻を切り。おかべ斷に枕すと。唐土の西施がやしけるも。かやうの姿にてありけるぞや。（蟬丸ノ詞）この御有様にてね。おか〳〵盗人の恐れもあるへ々れば。御衣を賜つて蓑といふものを參らせ上げ候。（清貫ノ詞）是は雨によるたみの、島とよみおきつる。みのといふ物か。（蟬丸ノ詞）また雨

露の御爲なれは。同しく笠を參らせる。（清貫ノ語）是はみさふらひみかさとやせとよみおきつる。笠といふものよふう。（蟬丸ノ詞）また此杖は御道去るへ。御手にもたせ給ふへし。（清貫ノ詞）實に〳〵是もつくからに。千年の坂をも越えなむと。かの遍昭がよみし杖か。（蟬丸ノ詞）（蟬丸既ニ世ヲ遁ス命ヲ聞キテ驚カズ一ヲ聞キテ十ヲ解ス所一々故事古歌ヲ樂証シテ漸念ス筆録自在竹ノ刃ヲ迎フルカ如シ）それは千年のさらゆく杖。（清貫ノ詞）爰は所も逢坂山の。關の戸さしのゐらゞの竹の。杖柱とゐたのみつる。父帝には捨てられて。かゝる浮世にあふさかの。知るも去らぬもこれみよや。延喜の皇子の成り行く果ぞ悲しき。行人征馬のかずか

む。上り下りの旅衣。袖をぬほりて村雨の。ふりをてかたき名殘らむ。〳〵。さりとてハ。いつを限りに有明の。つきぬ涙をおさへつゝ。はや歸るさになりぬれば。皇子ハ路に唯ひとり。御身に添ふ物とてハ。琵琶を抱きて杖を持ち。臥しまろびてぞ泣さぬふ。〳〵。

蟬丸既ニ世ヲ觀ストイヘトモ別ニ臨テハサスカニ哭ク人情寫シ得テ却テ姿体アリ

是ハ延喜第三の皇女。坂上とハ我事なり。我皇女と生るれとも。いつの因果の故やらん。心より〳〵狂亂して。邊土遠鄕の狂人となつて。綠の髮ハ空ざまに。生ひ上つて撫つれとも下らむ。いかにあれなる童子ども。何を笑ふぞ。なに我

髮のさかさまなるがをかしいとや。實にさかさまなることとハをかしいよな。さてハ我か身よりも。汝らが身にて我を笑ふこそさのさまあれ。面白し〳〵。是等ハ皆人間目前の境界なり。それ花の種ハ地にうつもつて千林の梢にのぼり。月の影ハ天にかゝつて萬水の底に沈む。是等をハ皆いつれをか順と見。逆なりといゑん。我ハ皇女なれとも庶人にくたり。髮ハ身上よりおひのほつて星霜をいたゝく。是皆順逆の二あり。おもしろや。柳の髮をも風ハ梳るに。風にもとかれむ。手にもまけられむ。かなくりをつるみての袂。拔頭の

花の種ハ云々○古語と聞ゆれと出典未勘

星霜をいたゝく○詞花集に年を經て星をいたたく黑髮の人よりしもまさりにけるかなとあり

柳の髮○和漢朗詠集に都良香の氣霽風梳新柳髮氷消浪洗舊苔鬚とあり

拔頭の舞○拾芥抄に拔頭乞食調也とあり

末ま ら河を打渡り云々
○白河は南禪寺の北より流れて三條鴨河へ落る小河なり粟田口は山城愛宕郡粟田山の下なり松坂は粟田口より日岡へ上る坂路なり
山科○宇治郡にあり
心は清瀧川と○玉葉集に世々を經て濁りにたるみし我心清瀧川にすゝきつるかなとあり
逢坂の関の清水に○拾葉集貫之の哥なり、詞書に延喜の御時日次の御屏風にとあり
走り井○関寺の邊大谷

舞かや淺ましや。花の都を立ち出てゝ〳〵。うきねになくこの鴨河や。末ま ら河をうちわたり。粟田口にも着きしのゞ。今は誰をかまつ坂や。關のこなたと思ひしに。跡にあるや音羽山の。名殘をしの都や。松虫鈴中蛬の。鳴くや夕陰の山科の。里人も咎むなよ。狂女を戴き黛も亂れ黑みて。實に坂上の影うつる。水を鏡とゆふ浪の。うつゝなの我姿や。

此段坂上京都ヲ狂ヒ出テ逢坂山ニ至ルコトヲ敘ス是客

といへる所に涌き出る水なり
水を鏡○白氏文集低頭向水看自粧とあり
第一第二の絃は○白氏文集に第一第二絃索々秋風拂松疎韻落、第三第四絃冷々夜鶴憶子籠中鳴第五絃聲尤掩抑灑水凍咽流不得とあり
世の中はとまるもかくにも○新古今集に蟬丸の歌と載せたり又首に擧けたる今昔物語にも見えたり
博雅三位○從三位皇太后宮權大夫源博雅醍醐

第一第二の絃は索々として秋の風松を拂つて疎韻落つ。第三第四の宮は。われ蟬丸がまらへも。四のをり（絃ノ折）からなりける村雨かな。（第三第四ノ絃トイフヘキヲ宮トカキテ宮聲ニウツレサテ第四ノ宮ノ蟬丸トカケタリ而ノ後句ハ四絃ノ琵琶ヨリ折柄トイフニカク筆ヲ弄スル工ニ過ク）あら心そごの夜すがらやな。世の中は、とにもかくにもありぬへし。宮も茅屋もてしおけれは。（蟬丸ノ述懷）ふしぎやな。これある茅屋のうちよりも。撥音けたかき琵琶の音さこゆ。そもこれ程の賤か屋にも。かゝる調のありけるよと。思ふにつけておとやらん。よになつかしき心ちして。あらやの雨の足音もせで。竊に立ち寄り聞き居たり。（坂上ノ情体）誰や。此

天皇の皇子兵部卿光明親王の子なり

栴檀は二葉より香し○華厳經に摩羅耶山栴檀香名曰牛頭以塗身設入火坑火不能燒とある本なり

あらやの外面に音をるゝ。此程をり〳〵訪られつる博雅の三位にてましまをか。是蟬丸ノ語近づき聲をよく〳〵聞けゝ。弟の宮の聲なり〻。なう坂上てそ參りたれ。蟬丸は内にましまをか。是坂上ノ語おゝ坂上とゝ姉宮か。蟬丸ノ語と驚き茅屋の戸をあくれゝ。さも淺ましき御有様。互に手に手をとりちむし、弟の宮か。坂上姉宮。蟬丸かと。共に御名をゆふつげの、鳥もねをあく逢坂のせき 詞花集

あへぬ御涙。互に袖やぞほるらん。兄弟邂逅ノ情体寫レ得テ真ニ近ル院本手習鑑梅王櫻丸邂逅ノ所蓋シ此筆ヲ學フ

ましてや一樹の宿りとして。風たち花の香をとめて。京鑑

淨藏淨眼○法華妙莊嚴王品に有王名妙莊嚴其王夫人名淨德有二子一名淨藏二名淨眼とあり早離速離○南天竺梵士の二子なり維母の爲ゝ孤島ゝ棄てられて道心を發し一切衆生の苦患を救ねんと誓て死たること淨土本緣經に載せたり

應神天皇の皇子云々○難波皇子ゝ御諱大鷦鷯命と申す仁德天皇なり宇治命ゝ仁德の御弟菟道稚郎子命なり

反に即位讓讓の○應神

花も連る枝とかや。遠くゝ淨藏淨眼、早離速離。近くゝまた應神天皇の御子。難波の皇子宇治の皇子と。互に即位讓讓の御志。皆是連理の情とかや。さりながら。こゝゝせうとの宿りとも。思ゝざりしにわらやの内の。一曲おくゝかくぞとも。いかてあらへの四の緒ゝ。ひかれて爰によるへの水の。淺からさりし契りかな。世ゝ末世に及ぶとても。日月ゝ地ゝ落ちぬならひとこそ思ひしに。我等いかゝれゝ王氏を出て。かくばかり人臣ゝまだにまゝゝらで。雲ゝの空をも迷ひ來て。都遠境の狂人。路頭山林の賤と成て。邊土旅人の憐み

帝崩御の後ふ仁徳帝と兎道稚郎子と互に御位を讓り合ひて三年ゟ及ふまて帝位空かりしとをいふ

日月の光云々○袁彦伯三國名臣序贊に日月麗天膽之不墜仁義在躬用之不匱とあり

村雨の音にたぐへて○琵琶行に大絃嘈々如急雨小絃切々如私語とあり

をたのむべかりあり。さるにても。昨日までは玉樓金殿の床を磨さて玉衣の袖ひさかへて今日はまた。一轉筆急かゝる所の臥所とて。竹の柱に竹の垣。軒も扉もまばらなる。わらやの床ゟわらの窓。敷く物とてもわらむしろ。是ぞいにしへの、錦の茵なるへし。俯仰感慨たまゝ〳〵ことゝふ物とては、嶺に木傳ふ猿の聲、袖を濕す村雨の、おとにたぐへて琵琶のねを、引き鳴らしひさならし、我ねをもなく涙の、雨だにも音せぬ、わらやの軒のひまゝ〳〵に、時々月は漏りながら、目にみる事の叶はねば。月にもうとく雨をだに、聽かぬわら

夕鴉云々○諸鳥あた物語ゟ夕からす二つ鳥うかれ鳥云々とあり

関の杉村○逢坂関に並ひ立てる杉林をいふ

やの起臥を、思ひやられて痛はしや。悲哀婉轉是迄なりやいつまても。名殘は更に盡さずまゝ。暇やして蟬丸。是坂上ノ詞一樹の陰の宿りとて。それだにあるゝ、まして寶弟の宮の御別れ。留るを思ひやり給へ。是蟬丸ノ詞寶に痛はしや我ながら。行くは慰むかたもあり。留るをさこそといふ雲の。立ちやそらひて泣き居たり。坂上あくや關路の夕鴉、うかれ心は鳥羽玉の、我黒髪のあかでゆく。別路とめよあふさかの、關の杉村をぎゆけば、坂上人聲遠くなるまゝゝ、わらやの軒にたゝぎみて蟬丸互にさらばよ、二人常には訪はせぬへ蟬丸と、かそかに聲のそる

程、聞さ送り、蟬丸かへりみおきて、坂上泣く〳〵別れおもしまそ、〳〵、二人○顧望低徊一結消魂讀ミ去テ曲ヲ闋ル能ハス

蟬丸坂上兄弟ノ邂逅ヲ作リテ、コレヲ逢坂關ニ湊合ス、一ハ盲目、一ハ狂心、世ヲ捨テ情ヲ忘レズ、俯仰感慨、流泉啄木亦更ニ悲哀ノ聲ヲナス、

頼政

頼政ハ、攝津守源頼光ノ玄孫ニテ、兵庫頭仲正ノ子ナリ、世ニ源三位ト稱ス、文武ノ達人ナリ、治承四年高倉宮以仁王ヲ奉シテ兵ヲ擧ケ、平氏ヲ討チ、亡タズシ

テ宇治平等院ニ死ニケリ、平家物語ニ、三位入道の一類、渡邊の党、三井寺の大衆引き具して、其勢一千五百餘人とぞ聞えし、中略さる程に、宮ハ宇治と寺との間ヨリて、六度まて御落馬あり〳〵り、是ハ去ぬる夜、御寢ならさりし故ありとて、宇治橋三間引き離し、平等院ヨ入れ奉り、暫く御休息ありけり、中略又堂衆の中に、筒井の淨妙明秀ハ、褐の直垂に黒革威の鎧さて、五枚甲の緒をしめ、黒漆の太刀を佩き、二十四さしたる黒母衣の矢負ひ、塗籠藤の弓に、好む白柄の大長刀取り添へて、是〳〵唯一人橋の上にぞ

進みたる、中略指貫脱ぎて跳になり、橋の行桁をさら〳〵と走りける、人ゝ恐れて渡らねども、淨妙坊が心地にゝ、一條二條の大路とこそ振舞ひたれ、中略こゝに東圓坊の阿闍梨慶秀が召し使ひける、一来法師といふ大力の剛の者、淨妙坊が後ゝ續きて戰ひけるが、行桁はせゞし、側通るへきやうゝおし、淨妙坊が甲のをころに手を置きて、惡しく候ふ淨妙坊とて、肩をづんと跳り越えてぞ戰ひける、中略平家方の侍大將、上總の守忠清、大將軍の御前にまゐり、あれ御覽候へ、橋の上の戰手痛く候ふ、今ゝ川を渡

をべきまて候ふが、折節五月雨の比、水まさりて候へゞ、渡さゞ馬人多くこひ候ひおん、淀一口(イセアラヒ)へや向ふへき、又河内路へや廻るへき、如何せんと申しけれゝ下野の國の住人、足利又太郎忠綱、生年十七歳にてありけるが、進み出て、申しけるゝ、淀一口河内路へゝ、天笠震且の武士を召して向ゝれ候てんずるか、それも我等こそ承りて向ひ候ゝんぞれ、目に懸けたる敵を討たぞして、宮を南都へ入れ參らせなゞ、吉野十津川の勢とも馳せ集りて、愈御大事にてこそ候ゝんぞらめ、中略坂東武者のならひ、敵を

目にかけ、川を隔てたる軍ゝ、淵瀬嫌ふやうやある、此河の深さ早さ、利根川に幾程の劣勝いよもあらじ、續けや殿原とて、真先にこそ打ち入きたれ、中略足利大音聲をあげて、弱き馬をば下手ゝ立てよ、強き馬をバ上手にあせ、馬の足の及いんほとい、手綱をくれて歩ませよ、はつまいかきくりて泳がせよ、下らん者をば弓の弭に取り附かせよ、手に手を取り組み、肩を並へて渡をへし、中略三百餘騎一騎もながさず、向の岸へさつとぞ打ちあげたる、中略爰に伊賀伊勢兩國の官兵等、馬筏押し破られて、六百餘騎こ

そ流れたれ、萌黄、緋威、赤威、色々の鎧の浮きぬ沈みぬゆられ々るい、神無備山のもみぢ葉の、嶺の嵐ゝ誘はれて、龍田川の秋の暮、井關にかゝりて流もあへぬゝ異ならぎ、その中に緋威の鎧着たる武者三人、網代に流れかゝりて、浮きぬ沈みぬゆられけるを、伊豆守仲綱見給ひて、かくぞ詠し玉ひ々る、

伊勢武者い皆ひおとしの鎧きて宇治の網代にかゝりぬるかな、中略三位入道渡邊長七唱を召して、我頭を打てと宣へば、主の生頸打たんずるとの悲しさに、仕るとも存じ候いぎ、御自害候いぎ、其後こそ賜

洛陽の寺社云々○京都まで朱雀大路より西を長安といひ東を洛陽といふ唐の都に擬していふなりまた南都は奈良をいふ

稲荷の社○神名帳に山城國紀伊郡稲荷神社とあり

り候はめと申しゝれは、實にもとや思はれけん、西に向ひ手を合せ、高聲に十念唱へ給ひて、最後の詞ぞあはれなる、

埋木の花咲くこともなかりしにみのなるはてぞかなしかりける、是を最後の詞にて、太刀の先を腹に突き立て、俯様に貫かれてぞ失せられける、トアリ此曲、凡テ此文ニ因リテカケルナリ、

是は諸國一見の僧にて候。我この程は都に候ひて。洛陽寺社残りなく拜み廻りて候。又是より南都に參らばやと思ひ候。（是僧ノ語）あま雲の、いなりの社伏し拜み。

深草○山城國伊紀郡にあり

木幡の關○山城國宇治郡矢島峽と城山との間を今関山といふ關の舊地なるべし

伏見の澤田○伏見は山城紀伊郡にて澤田は伏見と宇治との間なり

宇治里○倭名抄に宇治郡又在久世郡云々とあり

遠の里○彼方と云里なり宇治橋の東北にあり源氏浮舟帖に水増るをちの里人いかならんとあり

〳〵。なほ行く末は深草や。木幡の關を今越えて、伏見の澤田見え渡る。水の水上尋ねきて。宇治の里にも着にけり。〳〵。（京南ノ行程ヲ叙シ得テ簡潔）

實や遠國にて聞き及びし宇治の里。山の姿、川の流。遠の里、橋の景色。見所多き名所かな。あれ里人の來り候へかし（僧ノ語）なうなう。御僧は何事を仰せ候ぞ。（是里人ノ語）是は此所始めて一見の者にて候。此宇治の里において。名所舊跡残りなく御教へ候へ。（僧ノ語）所には住み候へども。賤しき宇治の里人なれは。名所とも舊跡とも。いさ白波の宇治の川に。舟と橋とはありながら。渡りかねたる世の中に。

宇治川○近江の湖より出て勢田を經て末い淀川とおるなり
舟と橋とい有おおち○古哥ゑ世の中に舟と橋とい有おおち渡り兼たる身をいかにせんとあるによれり
勸學院の雀云々○司馬温公勸學院の學校を監督せし時雀といへる侍童傍に在りて蒙求を暗誦する程ゑおりしと温公漫録に見えたり雀を鳥に取成す説も非おり

をむばかりなる名所舊跡。何とか答へ申べき。里人ノ語
いやさやうにい承り候へとも。勸學院の雀い蒙求を囀るといへり。所の人にてましませば。御心にくうこそ候へ。まつ喜撰法師が住みける菴いいつくの程にて候ぞ僧ノ語さきべこそ大事の事を御尋ねあれ。喜撰法師が庵い。我菴い都の巽しかぞすむ。世をうち山と人ハいふなり。人ハいふなりとこそ、主だにも申し候へ。尉ハあらぬ候。里人ノ語又あれに一村の里の見えて候ハ槙の島候か。僧ノ語さむ候。槙の嶋とも申し。又宇治の河島とも申おり。里人ノ語是ゑ見えたる小島が崎ハ。僧ノ語

喜撰法師が住ける菴○喜撰い古今集序ゑ宇治山の僧喜撰い詞かをかにして始終たしかおらぬとあり履歷知れ難し無名抄ゑ三室戸の奥二町むかり山中に入て宇治山の喜撰が住ける跡ありと云へり
我庵い都のたつみ○古今集喜撰が歌おり此僧の歌此一首の外世に殘らぬ
槙の島○今宇治橋の西北十町余ゑあり近世川を埋めて陸とおり槙島村といふと拾葉抄にい

名にたちはおの小嶋が崎。里人ノ語むかひに見えたる寺ハ。いかさま惠心の僧都の御法を説きし寺候お。僧ノ語おう〳〵。旅人あれ御覽ぜよ。里人ノ語名にも似ず、月こそ出つれ朝日山。〳〵。歎冬の瀬に影みえて。ゆきさしくたを。島小舟。山も川も、おぼろ〳〵として。是非をわかぬ景色かお。實や名にしれふ。都に近き宇治の里。聞きしにまさる名所かお。〳〵。宇治ノ風景イマタ寫シ盡サヽルニ似タリいかに申候。此所に平等院と申を御寺の候。御覽ぜられて候か。里人ノ語○先ツ平等院ヲ案内ス里人心ヤリ不知案内の事にて候程に。いまた見ぞ候。御教へ候へ。僧ノ語是こそ平等院ゑて候へ。又

へり
橋の小島か崎○宇治橋の南平等院の艮といへり
恵心の僧都○恵心姓ハト部氏名ハ源信寺をハ宇治ハ創めて恵心寺といひ又龍泉寺といふ
朝日山○宇治川の東ニあり
狄冬の瀬○八雲御抄ニ山城宇治川也とあり
平等院○帝王編年集成に永承七年三月廿八日関白左大臣以宇治別業爲佛寺平等院奉供養一二とあり此関白左大臣ハ

是なるハ釣殿と申して。面白き所にて候。よく〱御覧候へ。（里人ノ語）實に面白き所にて候、又是なる芝を見れハ、扇のごとく取り残されて候ハ、何と申したる事にて候ぞ。（僧ノ語）さん候。此芝について物語の候。語て聞かせ申し候ハん。昔此所に宮軍のありしに、源三位頼政合戦に討ち負々給ひ、此所に扇を敷き。自害し果てたまひぬ。されバ名將の古跡なれハとて。扇のなりに取り殘して。今に扇の芝と申し候。（里人ノ語）痛ハしや、さしも文武に名をえし人なれども。跡ハ草露の道のべと成て。行人征馬のゆくへのごとし。あら痛ハしや候。（僧ノ語）

藤原頼通なり
扇の芝○平等院中にあり芝艸を扇の形に存せり但後人の所爲なるべし
夢の浮世の中宿○宇治を中宿といふことハ源氏椎本帖に宇治わたりの御中やどり云々とありて花鳥余情に南都下向の人ハ宇治を中宿ります彼々の御幸にも平等院まて御儲の事あり云々とあり
宇治の橋守○宇治橋ハ帝王編年記に孝徳天皇大化二年丙午元興寺道

實ふよく御弔ひ候ものかな。去かもその宮軍の。月も日も今日に當りて候ハいかに。（里人ノ語）何とその宮軍の月も日も。けふに當りたると候や。（僧ノ語）かやうに申せバ我ながら。余所にハ非ぬ旅人の。草の枕の露の世に。姿見えんと来りたり。現とおもひ給ひそとよ（里人ノ詞）夢の浮世の中宿の。〱。宇治の橋守年をへて。老の波もうち渡す。遠方人に物申そ。我頼政が幽靈と。名告もあへぬ失にけり。〱（宇治ノ里人即是頼政ノ假身）さてハ頼政の幽靈假に顯れ我に詞をかはしけるぞや。いざや御跡弔らはん（是僧ノ語）と。思ひよるべの浪枕。〱汀も近し此庭の

登道昭奉勅始造宇治川橋とあり橋守い橋を守る人なり

打渡を遠方人に○古今集旋頭哥に打渡を遠方人に物申をあれそのそこに白く咲けるい何の花ぞもとあり

血い涙鹿の河と成て云々○太平御覽に黄帝有天下之半戰涙鹿之野血流漂杵とあるよりよれり

網代○此い一種の漁獵にて川中へ網の代りに物を造りて氷魚を取る料にするなり

閻浮○閻浮とい南贍浮

扇の芝を片敷さて。夢の契りをまたうよ。〳〵。僧扇芝ニ露卧スル情体輕々鳥ノ盡セリ而レテ浪枕片敷自然湊合

血い涙鹿の河と成て。紅波楯を流し。白刃骨を砕く。此語兼平ノ曲ニモ亦之ヲ見ル

よをうぢ川の網代の浪。あら閻浮戀ひしや。伊勢武者い皆ひをとしの鎧さて宇治の網代にかゝりけるかな。うたかたの、あてれを氷魚ノ異名

かなさ世の中に。蝸牛の角のあらそひも。てかおかりける心かな。あら貴の御事や。おほ〳〵御經讀みぬへ。

幽霊頼政ノ語ふしぎやな。法躰の身にて甲冑を帯し。御經よめと承るい。いかさま聞さつる源三位の。その幽霊にてましまさそか。僧ノ語實にや紅い園生に植ゑてもかくれお

州とてこの世界をいふ

佛家の語なり

蝸牛の角の爭ひ○白氏文集二十六に蝸牛角上爭何事石火光中寄此身とあり

五十展轉の功力○隨喜功德品に若人於法會得聞此經典乃至於一偈隨喜爲他說如是展轉教至於第五十最後人獲福とあるによる

直道○法華經を聞くことと展轉して最後の人たに福を得るにまして直道に經をきくとなり

佛在世に佛の說きし○

し。名告らぬさきに頼政と。御覽ぜるこそ恥しけれ。唯々御經よみぬへ。頼政ノ語御心易く思召せ。五十展轉の功力だに。成佛まさに疑ひなし。ましてや是い直道に。吊ひあせる法の力。あひにあひたり所の名も。平等院の庭の面。思ひ出たり佛在世に。佛の說きし法の場〳〵。爰ぞ平等大會の功力に。頼政が佛果をえんぞありがたき。今い何をかつゝむべき。是い源三位頼政。執心の涙に浮き沈む。因果の有樣顯すなり。此段前ハ僧ノ詞ト思想トヲ敘レ後ハ頼政ノ詞ト思想トヲ敘スレテ其境界殆ト段落スヘカラズ

そも〳〵治承の夏の比。よしなき御謀叛を勸めやし。名も高倉の宮のうち。雲井の

世尊靈鷲山にて法華經を說きしおとあり平等院の庭を佛の說法の道場と見るあり
爰ぞ平等大會の功力○見寶塔品ニ尓時寶塔中出大音聲歎曰善哉釋迦牟尼世尊能以平等大慧教菩薩法佛所護念妙法華經爲大衆說云々とあり
高倉の宮○後白河天皇第二の皇子御韓ハ以仁と申を三條高倉の御所におハしけれハかくハ申すあり
三井寺○近江國ニあり

よそにあり。あけの。月の都を忍び出て。うき時しもに。あふみ路や。三井寺さして落ちゆ。さる程に平家ハ時をめぐらさぞ。數萬騎のつハものを。關の東に遣ハそと。聞くや音羽の山つゝく。山科の里近き。水幡の關をよそに見て。爰ぞうき世の旅心。宇治の河橋うち渡り。大和路さして急ぎしに。寺と宇治との間にて。關路の駒のひまもなく。宮ハ六度まて御落馬にて。煩らハせ給ひけり。是ハさきの夜御寢ならざるゆゑなりとて。平等院にして。暫御座をかまへつゝ。宇治橋の中の間引き放し。下ハ河波上に立つも。共に白旗を

寺と宇治との間○寺とハ三井寺をいふ
筒井淨妙一賴法師○三井寺の衆徒あり
田原の又太郎忠綱○田原藤太秀鄕の後胤下野國住人足利太郎俊綱の子あり

なびかして。寄せる敵を待ち居たり。さる程ニ。源平の兵宇治川の。南北の岸ニ打望み。鬨の聲矢叫ひの音。波にさゝへておびたゝし。橋の行桁を隔て戰ふ。みかたにハ筒井の淨妙一賴法師。敵味方の目を驚せ。かくて平家の大勢。橋ハ引いたり水ハ高し。さまが難所の大河なれハ。左右なう渡をべきやうもおかりし處に。田原の又太郎忠綱と名乘て。宇治川の先陣我ありと。名告もあへぬ三百余騎。轡をそろへ河水に。さしも猶豫ハせ。群れ居る村鳥の翅をおちぶる。羽音をかくやとおぼし涙に。さつ〳〵とうちいれて。浮きぬ沈みぬ

頼みつる兄弟のもの○長男伊豆守仲綱次男源太夫判官兼綱をいふ

わたしけり一忠綱つゝものを下知していそく。水の逆巻くところをゝ。岩ありとあるへし。弱き馬をゝ下手に立て。強きに水を防がせよ。おかれん武者にゝ弓弭をとらせ。互に力を合そべしと。唯一人の下知によつて。さゞらりの大河あれとも。一騎も流れそこなたの岸に。おめいてあかれゝ味方の勢ゝ。我ながら踏みもためず。半丈ばかり覺にぞ去さつて。切先を揃へて。爰を最期と戰ふたり。さるほとに（さるほとに三騎早ノ頃ス）入り亂れ。我も〳〵と戰へば。頼政の頼みつる。兄弟の者も討れ。夕れば。今ゝ何をか期そべきと。唯一筋に老武者の。

是まてと思ひて。〳〵。平等院の庭の面。是なる芝の上に扇を打敷き。鎧ぬきそて座を組みて。刀を抜きながら。さゝが名を得し其身とて。埋木の花咲くことも。かかりしに。みの成る果ゝ衰なりけり。（四方）跡吊ひぬへ御僧よ。（歌ヨリ文ニツヾクル所カヲ賛サズ）假初ながら是とても。他生の種の縁にいま。扇の芝の草の陰に。歸るとてうせにけり。立ち歸るとて失にけり。（後半段唯是平家物語ノ直譯ニ過キズ）

前篇扨ムル所ノ無平ト、與二是同工ノ曲、ソノ文辭二至リテハ、未俄ニ弟兄スベカラス、

野宮

此曲ハ源氏物語榊帖ニヨリテ作リタリ、其節ノ大略ヲイヘハ、或大臣ノ女、桐壺帝ノ皇弟前坊ノ妃トナリ、一女子ヲ設ケテ、前坊薨シヌ、因テ寡居シテ六條御息所ト号ス、此女子年十四ニテ、伊勢ノ齋宮トナリ、マツ野宮ニ禊齋ス、是ヨリサキ、源氏ノ大將籠ニ六條御息所ノ許ニ通ヒ玉ヒシカ、後カレガレニナリケレハ、御息所トカク源氏ヲ限ム、カクテ源氏ノ北方葵ノ上ハ、賀茂祭ノ物見車ノ爭ヨリ、御息所ノ生靈ニタヽラレ、終ニ亡セヌ、コレニヨリテ、

337566

嵯峨野〇今の上嵯峨下嵯峨い昔い都て野なりしなり

源氏ハナホ〳〵御息所ヲ疎ク思ヒシカハ、御息所ハ世ヲ憂ク思ヒテ、齋宮ニ附キ添ヒテ、伊勢ニ下ラント心ヲ定メ、共ニ野宮ニ至ル、源氏コレヲ聞キテ、サスガニアハレニ思ヒ、九月七日バカリニ嵯峨野ノ露ヲ分ケテ、野宮ニ尋ネ入リ、カリソメノ對面ニ贈答ノ和歌アリテ、サテ別レ玉ヘリ、委シクハ葵榊ノ二帖ニアリ、

是ハ諸國一見の僧にて候。我此ほとハ都に候て。洛陽の名所舊跡殘りなく一見仕りて候。又秋も末になりぬ候へば。嵯峨野の方ゆかしく候間。立ち越え一見せば

野の宮○齋宮ト定あれむ伊勢御下向の前に御禊齋ある仮の御殿なり黒木の鳥居小柴垣○黒木は皮付の丸木小柴垣い木の小枝まて結ひたる艶なり源氏神帖に物いかゐけなる小柴を大垣にて板屋どもあさり〳〵いと仮初なめり黒木の鳥居どもはさをがに神々しく見渡されてとある詞をとれり

伊勢の神がき隔おく○例の本地垂跡の説にて伊勢は佛を忌み玉へども本地は隔てなしとの意に云へり

忍の草衣○おのぶどりの衣をいふ

齋宮○延喜式ヨ凡天皇即位者定伊勢太神宮齋王仍簡内親王未嫁者若無内親王者依世次簡諸王女定了また凡齋内親王定了即卜宮城内便所爲初齋院移徙而入至明年七月齋此禊更卜城外淨野造野宮畢八月上旬卜定吉日臨河祓禊即入野宮九日上旬卜定吉日臨祓河禊參入於伊勢齋宮とあり

やと思ひ候。是なる森を人に尋ねて候へゝ。野の宮の舊跡とかやゝし候程ふ。逆縁ながら一見せばやと存じ候。（是僧ノ話）我此森に来て見れば。黒木の鳥居小柴垣。むかしにかてらぬ有様なりこゝそも何といひたることやらん。よし〳〵かゝる時節に參りあひて。拜みやそぞ有難さ。伊勢の神垣隔おく。法の教のみちをぐに。こゝに尋ねて宮所。心もそめる夕かな。〳〵。（此段行僧ノ思想ヲ敘ス）

花ふ馴き来し野の宮の。〳〵。秋より後ゝいかあらん。

次第 折しもあれ。物の淋しき秋暮れて。ふほ志ほりゆく袖の露。身を碎くある夕まぐれ。心の色はおのつから。

千種の花にうつろひて。衰ふる身のならひあな。人こそあらねけふをヨ。昔の跡に立ち歸り。野の宮の、森の木枯秋ふけて。〳〵。身にあむ色の消えかへり。思へば古を、何と忍ぶの草衣。きてしもあらぬ假の世に。ゆきかへるこそ恨なれ。〳〵。（此段御息所ノ思想ヲ敘シテ下段ノ伏案トナス）我此杜の陰に居て。いとしへを思ひ心をそまを折節。いとあまめける女性一人。忽然と来りぬふゝ。いかある人にてましまをぞ（僧ノ語）いかなる者ぞと問ゝせぬふ。其方をこそ問ひ參らをべけれ。是ゝ古齋宮に立たせぬひし人の。假に移りまを野の宮あり。然れとも、其後ゝ

神垣い云々○神帖まある御息所の歌なり

此事絶えぬれども。九月七日の今日い又。昔を思ふ年々に。人こそ去らね宮所をきよめ。御神事をなもところに。ゆくへも知らぬ御事あるか。来りゆふい憚りあり。とく〳〵歸りゆへとよ。（是女性ノ詞）いや〳〵是い苦しかりぬ。身の行末も定めおき。世を捨人の教おるべし。さて〳〵哭いふりにし跡をけふごとに。昔を思ひぬふ。いいれていかおる事やらん。（僧ノ詞）光源氏、此所に詣てゆひしい。九月七日の日今日に當れり。其時いさゝか持ちゆひし榊の枝を。忌垣の内にさしおきゆへい。御息所とりあへず。神垣いおるしの杉もなきもの

昔にゝいちぬ色○同帖ゝいちぬ色をおるべにてとあるによれり

火焚屋の幽なる○榊帖ゝ火焼屋ゝすかゝおめ〳〵としてとあり火焚屋い衛士の火を焼く舎なり

を。いかにまかへて折れる榊ぞと。よみ給ひしもけふぞかし。（女性詞）實に面白き言の葉の。今持ちゆふ榊の枝も。昔にかいらぬ色よおう。（僧ノ詞）昔に變らぬ色ぞとい。榊のみてそ常磐の蔭の。杜の下道秋暮れて。紅葉ゝつゝ散り淺芽が原も。うら枯れの、草葉に荒るゝ野の宮の。〳〵。跡をつかしき。こゝにしも。その九月の七日の日も。今日に廻り来にけゝ。物ものかおしや小柴垣。いと假初の御住居。今も火焚屋の幽おる。光りい我思ひ内にある、色や外に見えつらん。あらさびし宮所。あらさびし此宮所。（御息所ノ詞ノカリテヤカテ其思想ヲ寫ス語々凄艶なほ〳〵御息所のい

前坊〇前の東宮ニて即位せさる前に薨去ありしなり坊とハ太子東宮坊ニ居玉ふ故にかくいふ

いるけき野の宮ニ云々〇榊帖に遥けき野邊を分け入り給ふよりいと物あはれなり秋の花皆衰へつゝ淺茅ヶ原も枯々なる虫の音ニ松風をてく吹合せてその事とも聞分れぬ程ニ物の音

れ。懇ニ御物語り候へ。僧ノ語そも〳〵此御息所をやまゐ。桐壺の帝の御おとゝ。前坊とやし奉りしが。時めく花の色香まて。いもせの心あさからざりしに。會者定離のならひもとよりも。おとろくべしや夢の世と。程なくおくれゐひ々り。さてしもあらぬ身の露の。光源氏のわりなくも。忍び〳〵に往き通ふ。心の末のなとやらん。まさたえ〳〵の中ゐりしに。つらき物にハ。さそがに思ひてゐハぎ。そるけき野の宮に。分け入りゐふ御心。いと物衰なりけりや。此段御息所前坊ニ仮レテ更ニ源氏ニ逢ヒ交情絶エントレテ又復相遇フコトヲノヲ秋の花、みな衰へて。虫の聲もかれが

どもたえ〳〵ニ聞えたるいと艶ありとあるにより

桂の御祓し同帖ニ十六日桂川ニて御祓し給ふとあり

身ハ浮草の〇古今集に佗ぬれば身をうき草の根を絶えてさそふ水あらむいなんとぞ思ふとあり

鈴鹿川八十瀬の浪に云々〇榊帖源氏君の歌ニ振り棄てゝけふハ行くとも鈴鹿川八十瀬の浪ニ袖はぬれじやとある返しニ御息所のよめる

れに。松吹く風の響まても。さびしき道そがら。秋の悲みもむてゐし。かくて君爰にまふてさせゐひつゝ。情をかけてさま〳〵の。言葉の露も色々の。御心の中ぞ衰なる。此段源氏ノ野宮ニ尋子入リレコトヲノヲ其後桂の御祓除。白木綿かけて河波の。身ハ浮草のよるべあき。心の水にさそハれて。ゆくへも鈴鹿川。八十瀬の浪にぬれ〳〵て。伊勢まで誰か思ハんの。ことのゝ添ひ行くこともため。しあきものを親と子の。多氣の都路にれもむさし。心こそ恨なりけれ。此段御息所源氏ニ別レテ伊勢ニ至リシコトヲノヲ實やいはれを聞くからに。平人ならぬ御氣色。其名を名のりゐへや。僧ノ詞

鈴鹿川八十瀬の波まぬれ〳〵ぞ伊勢まて誰ゝ思ひおおさんとある歌よりてかけり

言の葉ハ添ひやく○齋宮まゝ幼くて伊勢へ下を故ゝ母御息所の付添ひ下るハ先例なき由神帖よりてこの事をいへるなり

多氣の都○伊勢齋宮の御在所をいふ伊勢國多氣郡にある故なり

耻かしの森○山城國乙訓郡古河村北にあり

夕月夜影かすかなる○神帖に花やかに指出た

名のりても。かひなき身とて恥かしの。（なりてやよそ詞）に知れまし。よしさらば、其名もなき身ぞとといせぬへや。（女性ノ詞）なき身と聞くハふしぎやな。さてハ此世をてかなくも。（僧ノ詞）さりて久しき跡の名の。御息所ハ我。なり。（女性ノ詞○女性即是御息所と。）ゆふぐれの秋の風。森の木の間の（夕夕）夕月夜。影幽なるこのあたの、黒木の鳥居の二柱に。立ち隠れて失にけり。跡立ち隠れ失にけり。かたあくや。杜の木陰の苔衣。〳〵。同し色なる草筵。思ひをのべてよもそがら。かの御跡をとふとかや。〳〵。（前段ヲ送リ後段ノ迎ヲ用意ノ文法幽霊ノ曲皆此法ヲ用ユ）野の宮の、秋の千種の花車。我もむ

る夕月夜ゝ打ふるまひ給へる似る物なくめでさしとあり

網代の下簾○網代車ハ忍び車にて賀茂祭ゝ御息所の乘り給ひし車なり

賀茂の祭の車爭ひ云々○源氏葵帖に兼てより物見事心つかひしけり一條の大路所無くむくつけきまて騒さとり所々の御桟敷心々にまつくしたるまつちひ人の袖口さへいみしき見もものなりとあり

殊ゝ時めく云々○此文

かしに廻り来にけり。（御息所）ふしきやな。月の光も幽なる。車の音の近つく方を。見れハ網代（しろたれ）の下簾。思ひかけざる有様なり。いかさま疑ふ所もなく。御息所にてましまそか。さもあれいかなる車やらん。（僧ノ詞）いかなる車と問はせのへハ。思ひ出たり其昔。賀茂の祭の車あらそひ。主ハ唯とも（知白）あら露の。所狹きまてたてあらぶる。物見車のさま〳〵ふ。殊に時めく葵の上の。御車とて人を拂ひ。立ち騒ぎさる其中に。身ハ小車（をぐるま）の遣る方も。なしと答へてたておきたる。車の前後にもつとよりて。人々轅（ながえ）にとりつきつゝ。人さまなの輿におし

の大意い葵上い左大臣の娘源氏の本妻なり依て時めくといい云べりこの日葵上も御息所も物見ゐ出て給ひしが下部の者ども葵上方の權ゐて御息所の車を雜車の奥の物も見えぬ方へ押やりしを御息所口惜しき事に思ひしか源にて遂に生霊と成りて葵上を取殺をその事をゆへるなり

庭のたゝずまひ云々○神帖に若き公達など打つれてとかく立ゐつらふなる庭のさゞずまひも實に艶なる方ゐうけなりたる有樣なりとあり此文によりてかけり」

松虫の音にりん〳〵と○御息所の野の宮にての歌に大方の秋の別れも悲しきに鳴く音なをへを野への松虫とあり

内外の鳥居なり○内宮外宮の鳥居なり

火宅の門○法華經譬喩品にある現世の煩惱を長者が家の燒るゐ譬へし詞なり

やられて。物見車の力もなき。身の程ぞ思ひ知られたる。よしや思へゝ何事も。報いの罪によももれじ。身にあほうしの小車の。廻り〳〵きていつまでぞ。妄執を晴らしぬへやや。〳〵。（葵牛）

此段賀茂祭車爭ノコトヲ叙ス是實ニ妄執ノ本源

の袖、月ゐをかへをけしきかな、野の宮の、月も昔や思ふらん影さびしくも杜の下露、〳〵。（詞句幽絶）身の置き所もあもれむかしの庭のたゝずまゐ。よそにぞのゝる氣色もうなる小柴垣。露打拂ひとゐれし我も其人も。唯夢の世とふりゆく跡なるに。唯松虫の音ゐりん〳〵として。風荒々たる野の宮の。夜をがらなつかしや。爰ゐもとよりかたしけなくも神風や、伊勢の内外の鳥居に出入る。姿ゐ生死の道を。神ゐ受けをや思ふらんを。（妄執ヲ拂フニ神風ヲ以テレテ敢テ佛陀ノ力ヲ仮ラス是一種特色ノ法）又車に打乘て。火宅の門をや出てぬらん。火宅のかと。（末段語句延長却テ曲折アリ而レテ一結言ヒ破ラサル所更ニ妙）

謡曲ノ源氏物語ニ基クモノ、葵上、玉葛、浮舟、并ニ此曲等數種アリ、其文優劣ナシトイヘトモ、此曲ヤヤ上乘ニ居ル、因テ暫ク之ヲ叙ム、

予曾テ嵯峨ニ遊ヒ、所謂野宮ナルモノヲ訪フ、宮ハ竹篁ノ裡ニアリ、黒木ノ鳥居小柴垣依然トシテ存

セリ、顧望低回、愁ヲ含ム美人ニ逢ハサリシト雖
モ、亦苔ニ枕スル行僧ノ感慨ヲナセリ、此曲ヲ評ス
ル二方テ、イサヽカコヽニ附記ス、

千手

此曲ハ、千手ト重衡トノ關係ヲ合セ作リタリ、故ニ
一本ニハ題シテ千手重衡トイフ、重衡ハ平相國清
盛ノ五子、世ニ本三位中將ト稱ス、一ノ谷ノ戰ニ生
田森ノ副將軍タリシガ、戰敗レテ、源氏ノ侍庄ノ四
郎高家ノ爲ニ生捕ラレ、(盛衰記ニハ庄三郎家長ニ

作リ、東鑑ニハ景時家國等カ爲ニ生虜ラルヽコト
ヽナシ、長門本平家物語ニハ、景時トナス、)土肥實
平ガ手ヨリ、梶原景時ガ手ニ渡リテ、關東ニ下サレ
ヌ、平家物語ニ兵衛の佐殿、(頼朝)三位の中將殿に
對面して中略伊豆の國の住人、將野の介宗茂にぞ預
けられける、中略されとも將野の介い、情ある者にて
いたく嚴しくも當り奉らぬ、やう〳〵にいたわり
參らせ、剩、湯殿のぢつちひおとして、御湯引かせ
奉る、中將道をがらの汗、いぶせかりければ、身を
清めて失いれんにこそ、と思ひて、待ち給ふところ

に、や、ありて、年の齢二十ばかりなる女房の、色白く清げにて、髪のかゝり誠に美しきが、めゆひの帷子（カタヒラ）に、深附のゆまきして、湯殿の戸押あけて、參りたり、其跡に十四五ばかりなる女の童の、髪ゐあらめだけなりなるが、こむらこの帷子着て、半挿盥（ハンソウダラヒ）に柿入れて、持ちて參りたり、此女房かいしやくにて、や、久しく御湯ひかせ奉り、髪洗なとして、暇申しいてけるが男などゐことおくもぞ思しめを、女ゐおゝ〳〵苦しかるまじとて、鑑倉殿より參らせられて侍ふ、何事も思し召をことあらば、承りて申せ

とこそ、兵衛の佐殿ゐ仰せ候ひつれ、中將今ゐか、る身とおりて、何事か思ふへき、只思ふ事とて、出家ぞしたきを宣へば、彼女房歸り參りて、兵衛の佐殿に、この由を申を、兵衛の佐殿、それ思ひよらを、私の讐おらばてそ、朝敵として預り奉りたれゐ、叶ふまじとぞのたまひける、かの女參りて、三位の中將殿に、此由を申を、暇申して出てければ、中將守護の武士に宣ひけるゐ、さても只今の女房ゐ、優なりつるものかな、名をば何といふやらん、と問ひ玉へば、將野の分の申しけるゐ、あれゐ手越（タゴシ）の長者の

女にて候ふが、みめかたち心ざま優まわりおさも
のとて、此二三年い佐殿に召し置かきて候ふ、名を
ば千手（センジュ）の前と申し候ふ、とぞ申しける、其夕雨そそ
し、降りて、万、物淋しげおるをりふし、件の女房琵
琶、琴持ちて參りたり、狩野の介も、家の子郎黨十
餘人引き具して、中將殿の御前近く候ひけるが、酒
を勸め奉る、千手の前酌をとる、中將をこしうけて、
いと興なげおておいしければ、狩野の介申しける
い且聞し召されてもや候ふらん、宗茂い本より伊
豆の國の者にて候へば、鎌倉にてい旅にて候へと

も、心の及いんほとい奉公仕り候ふべし、何事も思
召さことあらば、承りて申せと、兵衛の佐殿仰せ候
ふ、それ何事にても申して、酒をを、め奉り給へ、
といひければ、千手の前酌をさしおき、羅騎の重衣
たるい、情なき事を機嫌にねたむ、といふ朗詠を、
一兩返ありけれい、三位中將、此朗詠をせん人を
ば、北野の天神、毎日三度かけりて守らん、と誓い
せ玉ふとなり、されとも重衡い、今生にていてや捨
てられ奉りたる身おまば、およおんしても何かせ
ん、但さいおやうかる見ぬへきことあらば從ふべ

し、とのたまへば、千手の前やがて、十惡といふも猶引攝を、といふ朗詠をして、極樂願てん人て皆彌陀の名號を唱ふべし、といふ今樣を、四五返謠ひましたりければ、其時中將杯を傾けらる、千手の前たまてりて、將野の分にさも、宗茂が飲む時に、琴をぞ引きそましたる、三位中將、普通にハ此樂をば五ぢやうらくといへども、今ハ重衡が爲にハ、後生樂をてそ觀ぜべけれ、やかてわうぢやうのさうを彈かん、とたてむれ琵琶を取り、てんじゆをねぎて、わうぢやうのさうをぞ彈かれける、かくて夜もや

うく更け、万、心のそむまゝに、あゝ思ハぎや、吾妻にもかゝる優ある人のありけるよ、それ何事にても今一聲、とのたのまへば、千手の前、重ねて、一樹の蔭に宿りあひ、同し流をむそぶも、皆是先世の契、といふ白拍子を、誠に面白くかゝへたりければ、三位の中將、燈暗くして數行麋氏が涙、といふ朗詠をぞせられける、中略さる程に、夜も明々ゝれば、將野の分ハ暇申して罷り出つ、千手の前も歸りけり、中略其後中將南都へ渡されて斬られ玉ひぬ、と聞えしかば、千手の前ハ、おかく思ひの種とありにけん、

鎌倉殿○頼朝をいふ
狩野介宗茂○伊豆の人狩野介茂光の子なり
相國の御子○相國い太政大臣のことにて此處は清盛をいふ
朝敵の御事とい○平家都を落てより木曽義仲上洛し後白河上皇より平家追討の院宣を下され平家の公卿殿上の簡を削らる是より平氏朝敵といなりしなり
かの千手の前云々○千手い駿河國手越の長者が娘といへり平家物語長門本にい白川の長者

やがてさまをかへ、濃き墨染にやつれて、信濃の國善光寺に行ひをまして彼後世菩提をとぶらひけるぞ哀なる、トアリ、此曲全く此文ニ因リテ作レルナリ

是い鎌倉殿の御内ニ狩野介宗茂にてい。さても相國の御子重衡卿い。此度一ノ谷の合戰に生捕られぬいを。其預りやしていい。朝敵の御事といやしながら。頼朝いたゝしく思召され。よくいたゝりやせとの御事にて。昨日も千手ノ前をつかいされて候。かの千手ノ前とやそい。手越の長が娘にていが。優にやさしくいとて。

の娘とす東鑑ニ文治四年四月廿五日於鎌倉千壽前卒去年廿四其性太穏便人々所惜也前左三位中將重衡參向之時不感相馴彼上洛之後戀慕之朝夕不休憶念之所積若爲發病之因歟之由人疑之とあり

東屋なるべし○東屋い催馬樂ニあもれ我つま東屋の、まやの余りの雨そゝぎ、我立濡れぬこの殿戸開らかせ、かすがひも戸さしもあらむこそ、其殿戸我さゝめ、押開きて來ませ我

作身近く召し使にれいを。遣されいこと。誠に有難き作志にて作座い。今日い又雨中作徒然。酒を勧めやさばやと存じい。（是狩野宗茂ノ語）琴の音そへてかとつるゝ。〳〵。是や東屋なるらん。（次第）それ春の花の樹頭に榮え。秋の月の水底に沈むも。衰れや重衡の、そのいにしへい雲の上かけても忘らぬ身のゆくへ。涙に漂ひ舟に浮き。さらばよるべの余所ぶりで。ありしにかへる有様かな。都にだにもとゝめぬ御涙なるを。いたゝしや陸奥の。忍ぶに堪へぬ雨の音。〳〵。降りをさびたる折りしもい。思ひの露も散り〳〵に。こゝろの花もおほ

や人妻、とあり
それ春の花の樹頭に云々○秋の夜長物語に夫春の花の樹頭に上るゝ上求菩提の機をすゝめ秋の月の水底に下るゝ下化衆生の相をあらはす云々とあり
陸奥の忍ぶゝ堪へぬ○陸奥に信夫郡あり
槿花一日之榮○白氏文集に松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮、とあり。
蜉蝣の定めなき○淮南子ニ蜉蝣朝生暮死而盡其樂とあり

ほと。志ほゝるゝ袖の色までも。けふの夕のたぐひかな。

〈。重衡幽囚ノ樣情景並ビニ叙メ尽ス

渡りいぞ。是宗茂ノ語千手ノ前が參りたるよし。それ〈。侍女ノ語暫く待ち候へ。機嫌を以てやさうず

やしいへ。身は是槿花一日の榮。命は蜉蝣の定めるにていゝ宗茂ノ語

ふさに似たり。心は蘇武が胡國にとらへれ。岩窟の内にこめられて。君還を忘れぬ志。それはやうりがをかりごとにて。敵を亡ぼし舊里に歸る。我はいつとなく敵陣にこめられて。縲紲の責を受くる。知らぜ今日もやや限りふらん。あら定めなやゝ。是重衡述懷ノ調いかにやし上げ

蘇武が胡國に捕はれ云々○前漢書ニ蘇武字子卿杜陵人武帝時以中郎將持節使匈奴單于欲降之幽武置大窖中絶不飲食天雨雪武卧齧雪與旃毛并咽之云々昭帝即位數年匈奴與漢和親漢求武等匈奴詭言武死常惠教漢使者言天子射上林中得雁足有係帛書在某澤中由是得還とある故事なり
やうり○此事未詳當時漢使ニ廣利ありこれを誤りたるにや

ひ。千手の作參りにてゝ。宗茂ノ語唯今は何の爲にてゝぞ。よし〈何事にてもあれ。今日の對面は叶ふまじいとやしゝへ。重衡ノ語畏てゝ。いかにやしゝ。御參りの由やしてゝへべ。何と思召しゝやらん。けふの御對面は叶ふまじきよし。仰せ出されてゝ。宗茂ノ語是も私にあらず。頼朝よりの御諚にて。琵琶琴もたせて參りたり。此由重ねて御やしゝへ。是千手前ノ語御諚の趣やしてゝへは。是も私にあらぜ。頼朝よりの御諚にて。琵琶琴もたせて參りたり。よし〈御憚はさることあれとも。是宗茂重衡ヘ申入ノ語サテ其返答ヲキカデ千手ヲ諸ヒ入ルナリ只此方へと請ぜれべ。其時千手立ち

御簾の追風（）薫物の匂ひなり

寄りて。妻戸をさりゝと押し開く。御簾の追風匂ひ来る。花の都人よとつかしながらみゝえむ。實やあつまのむてしまて。人の心の興深さ。その情こそ都おれ。花の春紅葉の秋。誰が思出と成りぬらん。（野花都人ニ添フ一段ノ風情アリ）

いかに千手ノ前。昨日あらさまにやしつる。出家の御暇の事。さうまほしうこそいへ。（重衡ノ語）さむい。其由やしていへば。朝敵の御事おるを。私として出家を許しやさんと思ひもよらずとこそいひつれ。妾も御心の中。推量りまゐらせて。いかほとよま〳〵とやしていへとも。かひおき出家の御望み。痛わしうこそいへ。

父命よりて佛像を亡し云々○重衡父清盛の命によりて南都を焼き拂ひしをいふ百錬抄に治承四年十二月廿八日藏人頭重衡朝臣追討南都（云々）今日東大寺興福寺堂舎僧房不殘一宇悉以焼拂佛法之滅亡偏在此時と載たり現當い現在當來の罪おり

唐衣きつゝおれにし○伊勢物語に唐衣きゝつゝ馴れにし妻しあれぬはる〳〵來ぬる旅をしぞ思ふとあり

千手ノ語口惜しや。我一ノ谷にていかにもおるべき身の生捕られ。今ハ東の果までも。かやうに面をさらすこと。前世の報といひおがち。又おもハぬも父命よりの。佛像を滅ぼし。人種を絶ちし。現當の罪を果をこと。前業よりおほはつかしうこそいへ。（重衡ノ詞）實よ〳〵是ハおんことゝり。さりおがら、かゝる例ハいにしへ今に。多きあらひと聞くものを。獨とお歎きぬひそとよ。（千手ノ詞）實によく慰めゐへとも。類ひハあらじ憂き身のて。昨日ハ都の花と榮え。今日ハ東の春に咲く。うつりかてれる身のほとを。思へ、唯世ハ空蟬のころ衣。（歌、出）か

手先さへぎる○前篇安宅ヨ註ヒ

羅綺の重衣たる云々○菅家文草早春内宴詩序ヨ羅綺之爲重邱衣無情於機婦節絃之在長曲怒不関於伶人とあり

い衣。きつゝ馴れにしつましある。都の雲ゐを立ち離れ。たゞ〳〵きぬる旅をしそ思ふ。衰へのうき身の果ぞ悲しきっ水ゆく川の八橋や、くもてに物を思へとね、かけぬ情のなか〳〵に、馴るゝや恨なるらん、〳〵。

くもてトイヒかけぬトイヒ自然ノ隙語ヲ以テ暗ニ虜囚ノ意ヲ述ヘ又暗ニ千手ト相親シムノ意ヲ叙ス情言外ニアリ今日の雨中の夕の空。御つれ〳〵を慰めんと。樽を抱さて參りつゝ。既に酒宴を始めむとそ。宗茂等重衡ヲ愛スルナリ千手も此由見るよりも。御酌に立て重衡の。御前にこそ參りけれ。今れいつしかたゞかりの。心ならぞも思ゐぞも。手まつ遥る盃の。心ひとつに思ふおもひっ重衡それ〳〵いかに何

十悪と雖も引攝す○雖十悪兮猶引攝甚於疾風披雲霧と後中書王の極樂寺を讃する句あり

にても。御肴にとそゝむれゐ宗茂其時千手とりあへぞ。羅綺の重衣たる情なきことを機婦に妬む。是千手朗詠ノ詞唯今詠しぬふ朗詠ゐ。忝くも北野の作作。此詩を詠ぜゐ聞く人までも守るへしとの作誓なり。さりながら重衡ゐ今生の望おし。唯来世の便こそ聞かまほしけれ重衡ノ詞其決心ヲ觀ル と宣へば。妾仰せを承り。十悪といふとも引攝そ。是亦千手朗詠ノ詞と朗詠してぞかなへける。さてもかの重衡ゐ。相國の末の作子とゐやせとも。兄弟にも勝れ。一門にも超えて。父母の寵愛限りなし。されとも時うつり。平家の運命悉く。つきの夜すがら声たてゝ。鳴

生田川に身を捨て、○生田川は摂津矢田郡生田村にあり身を捨てといふ昔津の國に住む女ありて其をよむ男二人有りけるに一人は同國園田に住む男姓は菟原今一人は和泉の國の人姓は陣弩とぞ云けるか共に志淺からぬありけるに女せん方なく思ひて彼三人なから生田川に身を投けて死にける由大和物語に見えたり生田川は重衡の向ひたる所なるに合せてかく身を捨てといつゝけ

くや牡鹿のつの國の。生田の河に身を捨て、。防ぎ戰ふと申せども。森の下風木の葉の露。おとされけるこそ哀なれ。いまゝ梓弓。よし力あし重衡も。ひかむとするにいつかたも、網を置たることくにて。道れ無ねたる淀鯉の。生捕れつゝ有てうき。身をうろくつの其まゝに。沈みね果てずして、名をこそながせ川越の。重房か手に渡り。心の外の都入り。寶や世の中へさためおきのお神無月。時雨降り置く奈良坂や。衆徒の手に渡りおわ。とにもかくにも果てねせて。又鑄倉にわさざる。爰いつくぞ八橋の。雲井の都いつかまた。

たり

道れ兼ねたる淀鯉の○淀は山城淀川をいふ此河は鯉の名所なり夫木集に我戀は淀の川瀬のつるき鯉身をも心に任せさりけりともよめり川越の重房か手に○重衡重房か手に渡ること諸本見えず

實や世の中は云々○此詞は後撰集に神無月ふりみふらぬみ定めなき時雨ぞ冬の初なりける又古今集に神無月時雨ふりおける楢の葉の名におふ宮のふるおとぞ

みゝなれの國や遠江。あしがら箱根打過ぎて。明もやらぬ星月夜。鑄倉山に入りしかば。うきかきりぞと思ひしに。おるれば爰も忍びねに。あれ昔を思ひ妻の、燭暗うして數行の虞氏が涙、雨さへあきる夜の空、四面に楚歌の声の中、何とかかへも舞の袖、かもひの色にや出てぬらん、涙をそへて廻らせも、雪のふるえの枯れてだに、花さく千手の袖おらば、重ていざやかへさむ。（悲歌慷慨曲二重衡ノ心情ヲ寫ス）忘れめや、一樹の蔭や一河の水。みなこれ他生の緣。（是千手今様ノ詞）といふまら拍子をぞ謠ひける。其時重衡興に乗じ。〳〵。琵琶を引き寄せ彈

しぬへて。また玉琴の緒合に。合せてきけい。峯の松風かよひきにけり。琴を枕の短夜のうたゝね。夢もほとなく去の、めも。ほの〳〵と明けわたる。空の淡まにやなりぬべき。あさまにやおりおんと酒宴をやめぬふ。御心の中ぞ痛いしき。（コハコレ悲歌ノ餘韻）のくて重衡勅により。〳〵。また都にとありしかば。武士守護し出て給へい。千手もおく〳〵立ち出て。なにおか〳〵の憂き契り。てやさぬ〳〵に引き離る、。袖と〳〵の露涙。げに重衡の有様。目もあてられぬけしきかな。〳〵。

源平歴史ノ謡曲ハ、多クハコレ平家物語盛衰記ノ

これとある二首を合せてつゝけたり

星月夜鎌倉山○堀川殿度百首に我ひとり鎌倉山を越行い星月夜こそ嬉しかりけれといへる哥あれい古くよりいひし詞なり又星月夜の井とて極樂寺の切通へ上る坂の下ふあり

燭暗うしてい云々○橋相公賦項羽詩に燭暗兵行虞氏淚夜深四面楚歌聲、とありて和漢朗詠集ニ入たれど重衡吾身を項羽ニ譬へ千手を虞氏に比して唱へしなり

白拍子○下學集に白拍子歌舞而衒賣女色之者也また徒然艸に通窓入逆舞の手の中ニ興有る事ともを撰ひて磯禪師ニをしも禪師の娘ぢか此藝を繼けり是白拍子の根元おりとあり

玉の緒の緒合ニ○緒合い琴の調べおり纖微拾遺集に我よむひ立る琴ぢの緒合せの只せめニのみ貫めもゆくかおともよめり

峯の松風通ひ來にける○拾遺集ニ琴の音に峯の松風通ふらし何れのをより調べそめけんとあり

勅によりて又都にと○南都の大衆重衡を頻ニ申請ふによりて鎌倉より直ニ南都へ渡さるるおり都へい入ちぜ或説に南都の衆徒より法皇ニ奏し法皇の勅によりて南都へ渡さるゝといへる事あれど此説によりしなり

直譯ナリ、然レドモ此曲ノ如キハ大ニ精采アリ而シテ其生前ノ事實ニ止メテ、幽靈ニ及ハサル、亦是特色タリ、

江口

此曲ハ、西行法師、江口ノ遊女ト、贈答ノ和歌ヲ布衍シテ、作レルナリ、撰集抄ニ、過ぎし長月廿日あまりの比、江口と云所を過しに、家々南北の川にさしてさみ、心々旅人の往来の舟を思ふ遊女の有様、いと哀にてかなき物と見たりし程に、冬々またしぐれ雨のさへくらし侍りしかば、賤がふせやに立寄り、晴間まつまの宿をかり侍りしに、あるじの遊女ゆるせ氣色も見えざりしかば、西行取あへず、

世の中をいとふまてこそのたからめ、かりの宿

りををしむ君かな、とよみ侍りしかば、あるじの遊女うちわびて、

家を出る人としきけばかりの宿に、心とむなと思ふばかりぞ、と返して、内ゝ入り侍りき、時雨の程なればしの宿とせんとこそ思ひしに、此歌の面白きに、一夜のふしと、ゝ侍りき、此主の女、今四十あまりにもなるらん、みめことから、さもあてやかにやさしく侍りき、夜もからなにとなき事どもかたりて、年頃そのふるまひを去侍りぬれとも、いとしくもなくぞ覺ゆ女ゝことに罪ふかきとうけたま

たるに、このふるまひをゐ侍る事、先の世の宿執のゆゑ、おもひゐられ侍りて、うたてしくおぼえしの、トアリ又新古今集ニ此贈答ノ歌ヲ載セテ、天王寺へまゐて侍りけるに、俄に雨降りければ、江口ヨリ宿をかりけるに、かし侍らざりければ、よみ侍りける、西行、トアリテ遊女ノ名ヲ妙トカケリ、サテ遊女ノ普賢菩薩ニ現ハレシコト、同書ニ、性空上人ハ、日比法華讀誦の劫ふより、まのあたり六根淨の功徳を得たりといへとも、生身の普賢菩薩を拜み奉らぬことを恨み、七日祈念しけり、七月の曉、天童

来りて、室の遊女ゥ長者をおかめ、それこそ真の普賢なれ、とゐめしてうせぬ、教めまゝに、室の長者が家に行て宿り玉ふに、長者出合、酌取て、上人に酒をそゝめ奉りて、周防のみたらしの澤邊に、風の音つれてうたへて、並び居たる遊女ども、同聲に、さゝら浪たつやれか、とうたひてやしけり、是ぞ生身の普賢にやと思ひ、目をふたき心をゐつめ玉へば、たんけん柔和の生身の普賢、白象に坐し玉ひて、法性むろの大海にて、恒順の月の光ほかゝらかなり、とうたてせ玉へり、又目をあきて見れい、遊女の長

者なり、うたゝ聲さゝら浪たつといふおり、上人たつとくたのもしきこと限なし、さていとまこひて出て玉ふ程に、一町ばかり去り玉ひてのち、此長者俄に身まかりけり、遊女として年をおくりしがとも、たれか是を生身の普賢といれもひ侍らト、トアリ、此事古事談ニモ載セテ、コレヲ神崎ノ遊女トセリ、江口ハ攝津國西成郡中島ノ河端ニアリ、後世一宇ヲ建テ、普賢菩薩ヲ安置シテ、普賢院ト号ス、江口ノ君ノ影アリトゾ、烏丸資慶卿ノ高野紀行ニ、漸々流れ行く程に、佐太の宮を一里ばかり過て、川の

西に小さき森の見えたるを江口と、遊女の庶跡とてあんあるを見んとて、指よせて上りぬ、川堤を一町ばかり行て、あらやのこゝたに、二間四面の堂あり、普賢堂ゝるへし、前にふりたる碑あり、よりて見れば、彌陀の名号をゝゝて、其下に、世をいとふ人としきけばかりの宿に心とむなと思ふてかりそ、とあり、右にハ攝州西成郡中島江口と見ゆ、左ハ文字消たり云々、トアリ、此江口ハ、中古頃ニハ、神崎ト並ヒ稱シテ、遊女ノ巣窟タリキ、

月ハむかしの友ならば。〳〵。世の外いつくゝらま

津の國○色葉字類抄に延暦十二年停摂津職爲國正四位下和氣朝臣始爲守とあり
天王寺○帝王編年記に推古天皇元年癸丑太子摂津國生田郡玉造岸上草創四天王寺依守屋追討之願也とあり
宇殿○宇殿は摂津國島上郡上牧村にあり
江口の君○君といふ遊女をいふ或は遊君ともいへり

し、次第是れ諸國一見の僧ふてい。我いまた津の國天王寺に參らぬほどに。此度思ひたち。天王寺に參らばやと思ひい。（是行僧ノ語）都をば。また夜深きに旅立ちて。〳〵。淀の川舟ゆくそもあれ。宇殿の芦のほの見えし。松の煙の浪よそる。江口の里に着きにけり。〳〵。（行程敘レ去テ輕妙）さて是ふるい江口の君の舊跡かや。蒲れしや。その身れ土中に埋むといへども。名れ留まりて今までも。音がたりの舊跡を。いまみることのあれさよ。實や西行法師此所にて。一夜の宿をかりけるに。主人の心おかりしかば。世の中をいとふまてこそかたからめ。かり

のやどりを惜しむ君かな。と詠でけんも此所にての事なるべし。あらいたはしやい。（僧慈吊ノ詞）おう〳〵あれなる御僧。今の哥をば何と思ひよりて口ずさみ給ひいぞ。（是女性ノ語）ふしぎやな。人家も見えぬ方よりも。女性一人来りつゝ。今の詠哥の口をさびを。いかにとをれせ給ふと。そも何故に尋ねゐぞ（僧ノ語）忘れてとしを經しものを。又思ひそむ言の葉の。草のかけ野の露の世をつ厭ふまてこそかたからめ。假の宿りを惜しむとの。その言の葉も恥かしけれ。さのみれ惜しみ參らせざりじ。そのことわりをも申さん爲に。是まて顯れ出

てたるなり。女性ノ詞心得ぞ假のやどりを惜しむ君かなと。西行法師が詠ぜし跡を。唯何となく吊ふ處に。さのみい惜しまざりにしと。ことわりぬふ御身い。さていかなる人にてましまぞ。僧ノ詞いや、されいこそをしまぬよしの御返事をやし哥をば何とてか詠じもせさせ給ねざるらん。女性ノ詞實にその返事の言の葉い。僧ノ詞世をいとふ人ともきけば假の宿に。心とむなと思ふべかりぞ。心とむなと捨人を。いさめやせべ女の宿りに。とめ參らせぬも理おらずや。女性ノ詞實にことわりあり西行も。假の宿りを捨人といひ。僧此方も名に負ふ色好

埋木の人知れぬ〇古今集序に色好の家に埋木の人知れぬ事とおりてとあり

我宿の梅の立枝や云々〇拾遺集平兼盛の哥おり

みの家にい。さーも埋木の人ぞきぬことのみ多き宿に。心とむおと詠ぢぬふい。捨人を思ふ心おるを。たゝをしむとの言の葉い。をしむこそ、をしまぬかりの宿おるを。〈。おとやをしむといふ涙の返へらぬ古い今どても。捨人の世語に。心おとゝめぬひそ。女性實やうさ世の物語。聞けば姿もたそがれに。うげろふ人いいかならん。僧たそがれにたゝぞむ影いほのほのぞ。見え隱れなる河隈ふ。江口の流の君とや見えん、はつかしやっ女性さてい疑ひあら磯の。波と消ゴし跡おれや。僧假に住み来し我宿の。梅の立枝や見えつらん。

遊女○倭名抄に揚氏漢語抄云遊女遊行女兒也一云賣遊行謂之遊女待夜而發其淫奔者謂之夜發とあり

佐用姫○肥前國風土記に松浦縣之東三十里有帔揺峯最頂有沼計可半町俗傳云昔檜前天皇之世遣大伴紗手比古領任那國于時奉命經過此處於是篠原村有娘子名曰乙等比賣容貌端正孤爲國色紗手比古便娉成婚離別之日乙等比賣登此峯擧帔招因以爲名とあり

思ひの外に君がきませるや。一樹の陰にや宿りけん。又は一河の流の水。汲みてもしろしめされよや。江口の君の幽靈ぞ。性と聲ばかりして失にけり。〳〵。僧ト女ノ問答禁雅ヲ発レス さては江口の君の幽靈。かりに顯れ。我に詞を交しけるぞや。いざ吊ひてうかべん。僧 といひもあへねばふしぎやな。〳〵。月澄み渡る河水に。遊女の謡ふ舟あそび。月に見えたる不思議さよ。〳〵。河船を。とめて逢瀬の浪枕。〳〵。うき世の夢をみならはしの。驚かぬ身のはかなさよ。佐用姫が松浦がた。片敷く袖の涙の唐土舟の名殘なり。また宇治の橋姫も。とはん

宇治の橋姫○袖爲余悄れ宇治橋姫は橋下姫大明神と申す神也とあり

秋の水漲り落て○朗詠集に秋水漲來舩去速夜雲收盡月行遲、とあるをとれり

ともせぬ人を待つも身の上と哀なり。よしや吉野の。花も雪も。雲も浪もあはれ世にあれば。よしや。此遊女ノ現出ヲ叙スル例ノ文法ナリ ふしぎやな月もみ渡る水の面に。遊女のあまた謡ふ歌。色めきあへる人影は。そも誰人の舟やらん。僧 なに此舟を誰が船とは。女 はつかしながら古の。江口の君の川逍遥の。月の夜舟を御覧ぜよ。遊女 そもや江口の遊女とは。それは去にしいにしへの。僧 いや古とは。御覧ぜよ月は昔にかはらめや。我等もかやうに見え来るを。いにしへ人とはうつゝなや。よしよし何かとのみふとも。いそしやさかしむつかしや。秋

十二因緣し聞覺經によるに一に無明、二は行、三は識、四は名色、五は六入、六は觸、七は受、八は愛、九は取、十は有、十一は生、十二は老死これを十二因緣といふ

流轉云々○六道講式に流轉無窮如車廻庭昇沈不定似鳥遊林とあり

前生又前生云々○愚迷發心集に鎖墮三途八難之惡趣所碍苦患而既失發心之諍或時適感人中天上之善果顛倒迷謬而未殖解脫之種先生亦先生都不知生々前來世猶來世全無辨世々終とある文をとりてかきたるなり

人中天上の善果を云々○竹馬經に依五戒十善四禪八定功勳力而得入中天上善果雖然善惡二業共是有爲法而未離三毒之窠窟とあり

三途八難し西域記に春秋有三途危險之處借此名途猶道とあり八難い金光明經ょ一心輕躁難、二近惡友難、三有險難、四三毒難、五遇無難難、六値好時難、七修功

の水、漲り落て去る舟の。月も影さを棹のうた。謠へぞうたへうたかたの。あはれ昔の戀しさを。今も遊女の舟遊。世を渡る一ふしを。謠ていざや遊べん。問答ヲ挑チテ

更ニ舟遊ヲナス文境始メテ轉ズ

それ十二因緣の流轉ハ。車の庭に廻るが如し。鳥の林に遊ぶに似たり。前生又前生。曽て生々の先をさらず。來世猶來世。更に世々の終りをわきまふることおし。或ハ人中天上の善果を受くといへども。顛倒迷妄していまた解脫の種を植ゑず。或ハ三途八難の惡趣に墮して。苦患にさへられて、既に發心の堪を失ふ。然るに我等たま〳〵受けがさき人身を受

けたりといへとも。罪業深き身と生れ。殊にためしをくおき河竹の。流れの女とある先の。世の報まて思ひやるこそ悲しけれ。紅花の春のあした。紅錦繡の山。粧ひをおそをみえしも。夕の風にさそはれ。紅葉の秋のゆふへ。黄纈纈の林。色をおくむといへとも。朝の霜にうつろふ。松風蘿月に言葉をかはそ。賓客を去て來ることおし。翠帳紅閨に枕をならべし妹背もいつのまにか隔つらん。凡心おき草木。情ある人倫。いつれあはれを遁るべき。かくハ思ひ知りながら。あるハ色ふ染み。貪着の思ひ淺からぬ。又ある時ハ聲

徳雖、八値佛亦難、とあり

河竹の流れの女○續後撰集に肥後、河竹の流れて來る言の葉い世ゴたくひなきふしとてそきけともとめり

紅花表朝○江相公詩に翠黛紅顔錦繡粧とあり

纈纈の林色○白氏文集に黄纈纈林寒有葉とあり

松風蘿月○本朝文粹ゴ松風蘿月僧老於煙巖之間とあり

翠帳紅閨に云々○大江

以言遊女記序に翠帳紅閨萬事之禮法雖異舟中浪上一生歡會是同とあり

六塵○三藏法數に塵即染汚之義一色塵　謂男女形貌等、二聲塵、謂男女歌詠聲等、三香塵、謂男女身分所有香等、四味塵、謂者聽巷味等、五觸塵、觸即着也男女身分柔軟細滑等、六法塵謂意根對前五塵而起善惡諸法とあり六根は即前の六塵と同物にて耳目鼻身心をいふ

實相云々○文句疏ゴ實相者是實智境一理非塵故言實相とあり無漏とい供舍頌疏に滿謂煩惱泄過窮無煩

を聞き愛執の心いと深き。心に思ひ口に言ふ。妄舌の緣とおるものを。實や皆人い六塵の境に迷ひ。六根の罪を作ることも。見ること聞くことに迷ふ心なるべし。巧ニ對句ヲ欲ムト雖モ文辭ヤ、硬骨ヲ免レス　おもしろや。實相無漏の大海に。五塵六欲の風い吹かねども。隨緣眞如の波の起たぬ日もおし。〳〵。浪の起居も何故ぞ。假なる宿に心とむるゆゑ。心とめずいうき世もあらじ。人をもしたいど。待ち暮もおく別れ路もあらし吹く。花よ紅葉よ有盛月雪の。ふることもあらよしあや。思へい假の宿。思へべ假の宿に。心とむなと人をだに。いさめし我ぞ。

前段ニ觀應ス　是まてなりやゆかへるとて。そおいち晉賢菩薩とあらいれ。船い白象となりつゝ。光とともにしろたへの。白雲に打乘て。西の空にゆきのふ。有難くぞ覺ゆる。ありがたくこそ覺ゆれ。遊女ハ即是普賢菩薩ノ假身故ニ言フ所凡テ是高尚ナル佛理

全篇唯是贈答ノ和歌ヲ布衍シタルニ過キス、故ニ前半凡テ僧女ノ問答ヲ以テ填メ去リ、後半僅ニ普賢菩薩ノ事ヲ假リテ局ヲ結フ、脚色平凡、文辭亦拙、コレヲ他ノ曲ニ比スルニ、劣ルコト數等　評シ畢テ予甚コレヲ叙メシヲ悔ユ、

惱名漏とあり五塵ハ前の六塵の中法塵を除き六欲は六根より起るをいふ
隨緣眞如○筆削に隨緣者隨染順流而成九相云々眞如ハ唯識論ニ眞謂眞實顯非虛妄如謂常衆無變易と
あり
普賢菩薩○法花文句に大論觀經同名通吉此經稱普賢又云伏道之頂其因周遍曰普斷道之後離聖曰賢
とあり又白象ニ乘ることハ明眼論ニ普賢座白象者用法身無色止行とあり

富士太鼓

此曲基ク所ノ事實、物ニ見エス、拾葉抄ニ、大系圖ヲ引キテ、花園院(號ニ萩原院ニ)御宇文保三年十一月、大嘗會の日、正三位中將參議有時卿、清暑堂神宴拍子に參ぞる所に、陣中にれいて敵人討ゝ之、後日の相爭とゐる、今夜拍子勤しむ、紙屋川顯香これを討と風聞を、依而顯香卿於ニ關東ニ罪せらるゝと、云々、トアリ、即此事實ニ、後撰集ニ載スル、信濃ゐる淺間の山も燃ゆあれば、富士の烟のかひやなからん、トイフ歌ヲ取リ合セテ、富士淺間ヲ佗人ノ名

萩原院○九十六代花園天皇を萩原院とも申を御諱は富仁伏見天皇第二皇子なり

管絃○文選註に吹曰管撫曰絃とあり管は笙笛等の類絃は琴瑟琵琶等の類なり

天王寺○天王寺の樂人は聖徳太子以來後世まで傳來せるなり

信濃なる淺間の嶽も云々○後撰集なる駿河の歌なり詞書に信濃へまかりける人に薫物を遣すとてとあり我名駿河といふより富士の烟を

トシ、かひやふからんトイフヨリ、富士討タルヽコトニ作リ成シタルナルベシ、

是は萩原院に仕へ奉る臣下なり。さても内裏に七日の管絃の御座候により。天王寺より淺間と申を樂人。是は雙びなき太鼓の上手にて候を召上せられ。太鼓の役を仕候處に。又住吉より富士と申を樂人。是も劣らぬ太鼓の上手にて候が。管絃の役を望み罷り上りて候。此由聞し召され。富士淺間いつれも面白き名なり。さりながら古き歌に。信濃なる淺間の嶽ももゆるといへば。富士の煙のかひやふからんと聞く時は。名

薫物をたきべて早下してやへるなり

こそ上なき富士なりとも。あつばれ淺間はまさうずるものをと。勅諚ありしにより。重ねて富士と申を者もなく候。さるほどに淺間此由を聞き。憎き富士が振舞かなとて。かの宿所に押寄せ。あへなく富士をうつて候。まことに不便の次第にて候。（此處蓋し事實ヲ顛倒セリ淺間ニ梅枝アリ同レク淺間富士決闘ノ事ヲ作リタリコレニハ富士ニ太鼓ノ役ヲ命セラレタルニヨリ淺間恨ミテコレヲ要殺スルコトニ作レリ事實素ヨリ應ニカクアルヘレ然ルニ此曲ノ如キニテハ淺間富士ニ何ノ恨ム所ヤアル）定めて富士ゆかりのあきとゝ候まじ。もし尋ね來りて候はゞ。形見をつかはさばやと存じ候。是臣下其ノ語

雲のうへ猶はるかなる。〳〵。富士のゆくへを尋ねむ次第

是は津の國住吉の樂人富士と申を人の妻や子

身を知る袖の涙○身を知る雨とはやがて涙のことをいふ
住吉の松の云々○住吉の松のひまより眺むれむ月落かゝる淡路島山といへる哥あり玄旨開書抄に頼政の歌とせり
男山○石清水をいふ山城國久世郡にあり
掛帯○岷江入楚に掛帯とい物詣でゝおどに女の掛る帯ありとあり

にて候。扨も内裏に七日の管絃のましまをにより。天王寺より樂人召さゝ參る由をきゝ。わらゝが夫も太鼓の役。世にかくれなければ望み申さんそのために。都へ上りし夜の間の夢。心にかゝる月の雨。身を知る袖ゝ涙ゝと。明しかねたる夜もそがらっ寝られぬまゝに思ひたつ。〳〵。雲ゝやそなた古郷ゝ。跡ゝれや住吉の。松の隙より。ながむれば。月落ちかゝる山城も。ゝや近つけば笠をぬき。八幡に祈り掛帯の。むをぶ契りの夢なりて。うつゝに逢ふや男山。都こそやく着きにけり。〳〵。（富士妻ノ詞ヨリ直ニ移レテ道行ヲ歌ス心緒繰綿）富士がゆかりと申そ

ゝ何處にあるぞ。（是臣下ノ語）是に候（是妻ノ語）さて是ゝ富士かため何にてあるぞ。（臣下ノ語）てつかしながら、妻や子にて候。（妻ノ詞）おう富士ゝうたれて候よ。（臣下ノ語）何と、富士ゝ討たれたると候や（妻ノ語一語肺腑ヨリ出ツ）あか〳〵のこと。富士ゝ淺間に討たれて候。（臣下ノ語）されゝこそ。思ひ合せし夢の占。重ねて問ゝゞなり〳〵ふ。淺間に討たれ情おく。さしも名高き富士ゝなと。煙とゝおりぬらん。今ゝ歎くにそのかひも。おき跡に殘る思ひ子を。みるゝらにいとゝ猶。進む涙ゝせきあへぞ。（妻ノ心情歌ヲ來テ哀レ）今ゝ歎きてもかひなき事にてあるぞ。是こそ富士が舞の裝束候よ。それ人の

夢の占○周禮ニ占夢以日月星辰占六夢之吉凶ニ
とあり

鳥甲○拾葉抄に鳥かぶとい天照大神の天石戸に籠らせ給ふ時諸神神樂を奏し常世の長鳴鳥を鳴かしめ給ふ事神代卷に見えたり長鳴鳥とい庭鳥を云ふ也然るに鳥甲の形い長鳴鳥を表したる者也とあり

當社地給の樂人○當社といふ住吉をいふ地給一に地久ゝ作る

秋猴が手を出し云々○秋猴い楚國の巫山の猴い秋になると左の肱三寸長く延るといふ又班妻が涙とは魏の時に班妻といふ女其夫の軍役に立ちし時別を惜みて血涙を流せしかは夫病み托して終に家に留りしといふこと和漢雜笈或問に見えたり

歎さにい。形見に過ぎたることあらじ。是を見て心を慰め候へ。臣下ノ語今までい。ゆくへもしらぬ都人の。妻を田舍の者と思召し。伴りぬふと思ひしに。まことに著き鳥甲。月日もかいらぬ狩衣の。疑ふ所もあらはこそ。痛いしや彼の人出て給ひし時。自申をやう自ハ妻自ナリ天王寺の樂人い。召にて上りたり。御身い敕諚なきに。押して參れば下として。上をいかるに似たるべし。其上御身い當社地給の樂人にて。明神に仕へ申す上い。何の望のあるべきぞと申しいを。知らぬ顔にて出て給ひし。その面影い身に添へど。真の主いおさ跡の。忘れがたみぞよしおき。無ねてより。かくあるべきと思ひあべ。〳〵。秋猴が手を出し。班妻が涙にても。留むべきものを今更ゝ。神おらぬ身を恨み。かこちなげくぞ哀おる。歎くぞあいれなりける。悲哀宛轉字々涙痕 あら恨めしやいかに姫。あれに夫の敵の候ぞや。いざうたう。妻ノ語あれい太鼓ゝてこそ候へ。思ひの餘りに御心亂れ。をちなきことを仰せ候ぞや。あら淺ましや候。娘ノ語うたての人のいひことや。館かで別れし我夫の。うせにしことも太鼓ゆゑ。たゝ恨めしきい太鼓なり。夫の敵ぞいさうさう。妻ノ詞實にことわりおり父でせゝ。別れし

鼓を皆に理まんと○堯の時初て諫鼓を置く民の訴ある者此鼓を打つあり然るに明王の代にい自ら民の訟もおけれも此鼓も皆に埋るといふ故事あり

貴鼓○軍陣の太鼓あり

こりのおく音○こり赤詳前赤壁賦泣孤舟之嫠婦とある句によりて孤嫠とかくか

嗔恚の焔○大論に以自大心故則喜生嗔恚憍慢是嗔恚之本嗔是一切重罪之本とあり

こ、こ、も太鼓ゆ、え。さあらば親の敵ぞかし。うつて恨をはらさべし。娘ノ詞 あらいがためにい夫のかたき。いざやねらはん諸共に。男の姿將衣に。ものゝくおれや鳥甲。恨の敵うちをさめ。鼓を苔ようつまんとて。よそるや時の聲立て、。秋の風よりをさましや。うてやうてやと責鼓。あらさてこりのなく音やな。猶も思へば腹立ちや。〳〵。消えたる姿に引き替へて。心言葉も及ばれぬ。富山か幽靈来るとみえて。よしおの恨みやもとかしと。太鼓うちたるや。夫ノ死モト太鼓ノ役ノ競爭ニ出ツ即チコレヲ敵ト做レ擊テ恨ヲ解ク意匠最妙 持ちたる撥をば劒とさため。〳〵。嗔恚の焔い太

名の下虛しからぬ○尺素往來に宇治者當代近來之御賞翫栂尾者此間雖衰微之躰名下不虛とある意なり

五常樂○體源抄に五常樂中曲或中大曲新樂又名五聖樂禮義樂或諧云大食調曲又博雅三位説此曲入平調云々とあり

修羅の大鼓○惡心云明阿修羅道者有二根本勝者住須彌山北巨海之底劣者在四大洲間山嚴中雲雷鳴是謂天鼓怖畏周章心大戰悼とあり即これを修羅の大鼓といい

鼓の烽火の、天ふあがれば雲の上人、まことの富士風に絶えずもまれて、裾野の櫻四方へとつと散るかと見えて花衣、さを手もひく手も伶人の舞なれば、太鼓の役にもとより聞ゆる、名の下虛しからず、たぐひなやなつかしや。實にや女人の惡心い。煩惱の雲霽れて。五常樂をうちたまへ。修羅の太鼓いうちやみぬ。此君の御命。千秋樂とうたふよ。さてまた千代や萬代と。民も榮えて安穩に。太平樂をうたふよ。急曲中怨チ此ノ太平樂ヲ挾ム抑揚緩急最佳 日も既に傾きぬ、〳〵、山の端をおがめやりて招きかへ舞の手の、嬉しや今こそい思ふ敵い打たれ、う

ふるり
千秋樂○拾芥抄ニ千秋樂盤渉調無舞云々體源抄ニ此曲後三條院康治三年大嘗會風俗所預主殿物類吉奉勅作云々とあり
太平樂○拾芥抄ニ大食調也云々體源抄ニ或拔劒舞之曲ともあり
日も既ニ傾きぬ云々（拾芥抄ニ陵王越起内沙陀調曲也云々體源抄ニ羅陵王名蘭陵王没日還午樂日拔返手とありて陵王の舞をいふなり

たれて音をや出そらん、我にハ霽るゝ胸の煙、富士か恨みをてらせば、涙こそうへなかりけれ、是まてなりや人ゝよ、〳〵、暇申してさらべと、伶人の姿鳥甲、みなぬきそて、我が心、亂れ笠亂れ髮、かゝる思ひハ恋れゞと、また立ち歸り太鼓こそ、うさ人の形見なりけれ、と見置きてぞ歸りける。跡みれさてぞ歸りける。

（餘韻太鼓ト相響ク）

謠曲中、更ニ新面目ヲ開ク、番々ヲ讀ミ來リテ、馬頭始見米曩花ノ思アリ、
又梅枝曲、コレト同事實ヲ作爲セリ、サレト此曲文

章、カレニ優ル一等
又此曲天陰リ雨降リ終ニ風雨霽瀝シ、忽チニシテ天晴レ風止ミ、夕陽光ヲ顯シタルモ、尚殘雲ノ素月ヲ掩フ趣アリ、

講曲新評後篇畢

明治二十四年十二月二十二日印刷
同　年十二月二十三日出版

評註者　東京本郷區西片町拾番地　增田于信

發行者　東京本郷區本郷壹丁目四番地　齋藤權右衛門

印刷者　東京神田區今川小路三丁目一番地　田口高朗

發行所　東京本郷區本郷壹丁目四番地　三河屋書店

版權所有

賣捌所

東京神田區表神保町　中西屋書店

同　日本橋區通三丁目　丸善書店

同　神田區表神保町　東京堂

同　神田區裏神保町　上田屋支店

同　神田區錦町三丁目　朝陽堂

同　本郷區元富士町　盛春堂

大坂備後町　梅原龜七